

サム。「はい、いたします。悦んで」

慎。「天國とは何んですか」

サム。「神の住みたまふ所ですから、最も祝福な場所、又状態です」

慎。「地獄とは何んですか」

サム。「それは罪と悪魔と死との住家ですから、最も禍の場所又状態です」

慎。「あなたはこうして天國へ行くことを望みますか」

サム。「神を見、倦むことなく神に仕へられるからです、又基督を見、永久基督を愛することが出来るからです。又此世では決して悦ぶことが出来ないほど、心の裡に聖靈を充すことが出来るからです」

慎。「ほんとうに善い子ね。能く學びなさいました」

やがて慎子は長男のマタイに話しかけた。「さあ、マタイさん、あなたも私と問答して下さいますか」

マタイ。「えい、悦んで」

慎。「では、お尋ねしますが、神より前に何にか存在したものが御座いますか」

マタイ。「ありません。神は限りなく在りました。だから、神のほかには、世の始めの日まで、存在したものは何にもありません。六日の間に、エホバは天と地と海とその内にあ

る一切の物を造りたまひました」

慎。「では、聖書のごときはどう想ひますか」

マタイ。「それは神の聖言であります」

慎。「その内には、あなたに解らない事は書いてありませんか」

マタイ。「あります、澤山」

慎。「あなたはさういふ解らない所に出遇つたら、どうなさいますか」

マタイ。「神は私よりも賢い方だと想つて、どうぞ、神が私の益となると思召すことは、凡て解るやうにして下さいと祈ります」

慎。「それでは死せる者の復活といふことを、どう信じておられますの」

マタイ。「私は人皆な葬むられしもの状態で復活することを信じます。さう信ずるには、二つの理由があります。一つは神がそれを約束したまへること、又他の一つは、神は能くそれを爲したまふことです」

そこで慎子は子供達に言った。「あなた方はこの上にもお母さんに教へていたいなさいましね。まだ學ぶことが澤山ございますから。それから他の人でもあなた方に善い話をして下さつたら、熱心にお聞きなさいましね。あなた方のために、それは善い事を話して下さるのですから。それから心を留めて、天地萬物があなた方に教へる所を學びなさいましね。それから殊にあなた方のお父様が旅人とおなりになる原因であつた御書を能く讀んで、それを味はひなさいましね。私もあなた方が此家に居られます間に、私に出来るだけのことは教へてあげませうね。聖き徳を建つるやうなことを、あなた方がお尋ね下さつたら、私、ごんなに嬉しいでせう」

慙うして旅人達は此所に滞在して一週間経つた頃、哀憐女を訪ねて来た人があつた。それは性急者氏といつて、哀憐女に親切らしく仕た。可成教養のある人で、信者の振をしたが、實は甚だしい俗物であつた。彼は哀憐女の許へ、一度ならず、二度三度訪ねて来て、懇ひ慕つてゐることを白状した。哀憐女の容貌は麗はしかつたので、一層その心を誘ふのであつた。哀憐女はいつも仕事に心忙しかつた。自分のためには何にもすることがないので、他人のために長襪や衣物を作つて、貧しい人達に恵んでやつたりした。性急者氏は哀憐女がその作

らへたものを何處にどうするのか、知らなかつたが、兎に角その怠け者でないのを見て、大いに心を動かした。「善い細君になるがな」と彼は獨語いた。

やがて哀憐女はこの家の娘達に事情を明して、この人の身の上について尋ねた。娘達は哀憐女よりもこの人のことを能く知つてゐたので、彼が極めて性急しない若者であること、信者の振をしてゐるが、多分善といふ方については赤の他人でせうと話した。

「さうですか、それでは」と哀憐女は言った。「私はもうお目にかゝりますまい。私の靈魂の阻碍となつては大變ですから」

慎子はそれに答へた。「あの方のことなら大して御心配にも及ばないでせう。今まで通り貧しい者のために盡しておゐるでなされば、直きにあの方の執心も冷めませうから」

で、その次の時にかの人が来て見ると、哀憐女はいつもの通り、貧しい人のために種々な物を作つてゐた。そこで彼は、「やあ、いつも御仕事ですね」と言つた。

「はい、自分のためやら、他人のためやら」と哀憐女が言つた。

「日にどれ位儲かりますか」と彼が言つた。

「私がかういふ仕事をいたしますのは」と哀憐女が言つた。「善き事に富み、善き基を蓄はへ

て、來たるべき時の備へをして、限りない生命を獲たいため(テモテ前六〇)なのでございます」

「それでは、かういふ物を作らへて、それをどうなさいますのですか」と彼が言った。

「裸なる者に着するためです」と哀憐女が言った。

これを聞くと、性急者の顔色が變つて、もう再び哀憐女の許に來なくなつた。人にその理由を尋ねられた時に、彼は恚う言つた。「哀憐女は奇麗な娘だが、その心懸が氣に喰はんものですからな」

彼が立ち去つた時に、慎子は言つた。「私がお話し仕た通り、性急者さんは早速あなたを思ひ切つてしまつたでせう。で、これから必條あなたのことを悪く言ひ觸しますよ。信者の振をしたつて、哀憐女さんを愛するやうに見せかけたつて、哀憐女さんとあの人とは全たく性が合ひませんから、一緒になれる道理がありません」

哀憐。「そんなこと誰にも申したことはございせんが、これまでも良人を持たうと思へば持てました。でも、皆な私の心懸を好かない人達ばかりで。私の人格には何にも悪い所を見つけないのですが。ですから、縁談は出來すじまひでした」

慎。「今では哀憐といふことは名ばかりになつてしまひましたのね。だから、あなたのお心

懸から出て來る實行は、誰も堪へられなくなつたのですね」

「さうですのね」と哀憐女が言つた。「誰も私を迎へて下さらなければ、私は一生獨身で暮すばかりですわ。私の心懸を良人とも想ひましてね。だつて、私は自分の性質を變へることは出來ませんし、それから心の合はない人に身を任せることは、一生經つたつて出來せんからね。私には仁子といふ一人の姉がございまして、さういふ品の悪い人の許へ縁付きましたのですが、とても折合ひがつきません。それでも姉は始めの志を貫ぬかうと決心して、貧しい人達に親切にしましたものですから、良人にさんざ罵しり辱かしめられて、擧句のはてにはその家を逐ひ出されてしまひました」

慎。「でも、その方は信者なのでせう、確然」

哀憐。「まあ、さうなのでせう。でも、今の世の中はそんな人ばかりごちや／＼してゐますのね。私、そんな人達は眞平です」

その内に基督女の長男のマトイが病氣になつた。中々の重病で、腹が大變痛むし、時々これが最後かと思ふほど痙攣けるのであつた。けれどもそこから程遠からぬ所に老練者といふ年老いた評判の善い醫者があつた。基督女はその來診を求めたので、使者をやると、早速來

てくれた。醫者は部屋に通つて、一寸と子供を診察して、これは腸痛だと診断した。やがてその母親に向つて、「マタイさんは近頃どんなものをお喰りでしたか」と言つた。

「喰べ物といつて」と基督女が言つた。「なにも良くないものは喰べませんのですが」

醫者は答へた。「この子は何にか胃に消化れない物が入つたので、それで苦しんでゐるのです。どうにかしないと中々痛みは去りません。私の想ふには、早く胃を調べてやるですな。さもないと危険いですわい」

その時サムエルが言つた。「お母様、兄さんはそら、拭ひで喰つたでせう。あの、路の入口にあつた門を入つて直きにね。そら石垣の向ふ側の左手に菓實の園があつて、その石垣から木の枝が垂下つてゐてね。その實を兄さんは拭ひで喰ひましたね」

「さうでしたね」と基督女が言つた。「それを取つて喰べたのね。悪戯兒だから、私が禁めても、聞かないで喰べました」

老練。「どうも良くない物を喰べたらうと思ひました。しかも一番毒な菓實を食つたとはな。それはベルゼブルの園の菓實ぢや。誰もその事をお前さん方に注意しなかつたとは不思議ですな。それを食つて死んだ者は澤山あるに」

そこで基督女は泣き出した。「あゝ、悪戯兒も悪戯兒だし、不注意な母も母です。息子のためにどうしたら可いでせう」

老練。「まあ、さう力を落しなざるな。子供は快くなります。吐いて潔まりさへすれば」

基督女。「どうぞお醫者様、お金はどんなにかゝつても、充分御療治下さいまし」

老練。「いや、私は法外な金など欲しくはない」

恚う言つて、先づ潔めの療治をしたが、あまり効能が弱かつた。それには山羊の血と焼ける牝犢の灰と牛膝草の汁(ヘアライオ)を用いたのである。老練者はその潔めの効能があまり弱いを見て、更に一つの藥を製へた。それは ex carne et sanguine Christi (基督の肉と血を調劑したものである (ヨハ子六〇五) これに約束を一匙二匙とそれに準じた分量の鹽(マカ九〇)を加へて、丸藥にしたものである (醫者といふものは御存じの如く奇妙な藥を病人に與れることがある)。これは一度に三粒づつ、斷食をしながら、悔改の涙の一バイント(一勺餘)の四分の半で呑み下すべきものであつた。

この藥を調のへて、呑せやうとした。子供は腸が痛んで痙攣つて片々になりさうであつたが、なほそれを呑むことを嫌がつた。

「さあ、さあ、これをお呑みなさい」と醫者が言った。

「胸が悪いから嫌だ」と子供が言った。

「これを飲まずてはいけません」と母親が言った。

「呑んでも吐いちまうから嫌だ」と子供が言った。

「お医者様」と基督女は老練者に向つて、「これはどんな味がいたしますのでせう」

「悪い味ぢやない」と醫者が言った。

で、基督女は丸薬の一つを舌の先で嘗めて見て、「マタイや、このお薬は蜜よりも甘いよ。

お前がお母さんを愛するなら、兄弟を愛するなら、哀憐女さんを愛するなら、又お前の生命

を愛するなら、これをお飲みなさい」

さて種々と拒んで見たが、やがて神の祝福を短く祈つて、子供はそれを呑んだ。するとそ

の効能が著るしく顯はれて、忽ちその身は潔まつて、安らかに眠り、靜かに休むことが出來

るやうになつた。熱も下るし、汗も引いて、全然腹痛が癒つてしまつた。暫らくすると起き

上つて、杖にすがつて室から室へと歩き廻つて、慎子や敬子や愛子に、病氣のことや、その

癒つたことを話したりした。

かやうに子供が癒つたので、基督女は老練者に問ねた。「先生のお骨折で、子供が癒りました

が、御禮はどれほどいたしたら宜ろうございませう」

醫者は言った。「あなたは醫學校の校長の方へお禮をして下さい。そのお禮は規約で定めて

あります (ヘブライ十三)

基督女。「先生、この丸薬は他の病にも効きますのですか」

老練。「これは萬能丸ぢやから、旅の道中で起る一切の病氣に効きます。善く調劑すれば、

意外に永く保ちます」

基督女。「どうぞ、先生、十二箱ほど私に調べて下さいませう。それがあつたら、他の薬

は入りますまいから」

老練。「この薬は病人に効くやうに、病氣の豫防にも善いのです。私は斷言しますが、人若し

この薬さへ用ゐて居れば、必ず限りなく生きます (ヨハネ六) ちやが、基督女さん。この丸

薬を用ゐるには私の上げる處方通りになさい。その他の用ゐ方をして何んの効能もないぢ

やて」

恚う言つて、醫者は基督女と子供達と哀憐女とに薬を與へた。それからマタイには熟しな

い生梅を食はないやうに注意して、人々に接吻して、歸つて行つた。

先きに話したやうに、慎子は子供達に向つて、何んでも益になる事は何時でも尋ねなさい、悦んでお答へしますと言つて置いたことがある。

そこで病氣をしたマタイは慎子に尋ねた。「一體どうして薬は口に苦いのでせう」

慎。「それは肉の心には神の言葉とその力とがいかにも氣まづいことを表はすのです」

マタイ。「薬が善いものなら、どうして身を潔めたり、嘔氣を催すのでせう」

慎。「それは神の言葉が力ある作用をなす時には、人の情と意とを清めることを表はすのです。ですから、薬が身體に効くやうに、神の言葉は靈魂に効くので、見た所變りはありません」

マタイ。「それでは火の焔が天上に立ち登るのを見たり、太陽の光と快い力で下界を照すのを見たりして、どんなことを學びませうか」

慎。「火の立ち昇るのを見ては、私共の熱く熱せる願望が天に上ることを教へられます。又太陽が熱と光と快い力を下界に送るのを見ては、世の救主がいと高きにゐましても、尙ほ下界の私共に恩寵と愛とを下したまふことを教へられます」

マタイ。「それでは雲は何處からその水を得るのでせう」

慎。「海からです」

マタイ。「それから學ぶべきことは何んでせう」

慎。「それは道を説く者がその説を神から得るに似てゐます」

マタイ。「雲が地上に水を降りそぐのはどうしてやせう」

慎。「それは道を説く者が神について知れる所を悉く世の中に與ふべきことを表はすのです」

マタイ。「では、虹が太陽から生ずるのはどうしてやせうか」

慎。「それは神の恩寵の契約が基督に於て私共に堅うせられたことを表はします」

マタイ。「それでは泉が地の中を通つて海から來るのはどうしてやせう」

慎。「神の恩寵が基督の身體を通して、私共に來るのを表はします」

マタイ。「泉の中には高い山の頂上から湧くものがあるのはどうしてやせう」

慎。「それは恩寵の靈が大きな力ある者にも、又貧しく低き者にも湧き出づることを表はすのです」

マタイ。「それでは火が蠟燭の心に點くのはどうしてやせう」

慎。「それは恩寵が心に燃えなければ、私共の裡には眞正の生命の光がないことを表はします」

マタイ。「蠟燭の光を保つために、心も蠟も皆な費やされるのはどうしてやせう」

慎。「それは私共の裡にある神の恩寵を善き情態に保存するために、私共の身も魂も皆な用ひ盡すべきことを表はします」

マタイ。「それでは塘鵝といふ鳥は自分の嘴で自分の胸を突き破るさうですが、どうしてやせう」

慎。「それは自分の血でその雛を養ふためですから、基督がその雛である人民を愛するために、死とその血に依つてこれを救ひたまふことを表はします」

マタイ。「鶏の鳴くのを聞いて何にを學びますか」

慎。「ペテロの罪とその悔改めを思ひ出します。鶏の鳴くのは日の出を告げるのです。だから、鶏が鳴いたら、世の終りの怖ろしい審判の日のことを心に想ひ起しなさい」

もうこの時は一月餘りにもなつたので、暇を乞ふて出立しても宜しいでせうと家の人々に告げた。その時ヨセフは母親に言つた。「あの註釋者さんの家に人を遣つてね。大勇者さん

に來てもらふのを忘れないやうになさいね。これから前きも道案内をしてもらふやうに」

「善く氣が付きました。私はぼんやりしてゐました」と母親が言つた。

で、依頼狀を認めて、門番の警護者に願つて、註釋者の家に誰れか適當な人を遣つてもらふことにした。その使者が註釋者の許に往くと、註釋者はその依頼の手紙を讀んで、使者に言つた。「早速遣しますと傳へて下さい」

さて基督女が滞在した家の人達は、愈々その出立するつもりなのを見て、家中の者が皆集まつて、かやうに有益な客人を送別するために、王に感謝した。さうしてから、家の人達は基督女に言つた。「あなたに見せるものがございます。それを見せるのは旅人に對する此家の習慣になつてをりますから、あなたもそれを見て、途々深くその意味を考へて下さい」

憊う言つて、基督女と子供達と哀憐女とを密室に案内して、エヴが自から喰ひ、その良人にも喰はせたので、兩人共淨樂園から逐はれたといふその林檎の一つを見せて、これをどう想ひますかと問ねた。基督女は「それは食べて善い物か、毒であるか、私には解りません」と言つた。そこで家の人々はその事實を打明けたので、基督女は兩手を舉げて、吃驚した

(創世三〇一―一六)
ロマ七〇―七四

次にとある場所に連れて行つて、ヤコブの梯子(創世廿八)を見せた。折しも幾多の天使がその上に昇つてゐた。基督女は天使の昇るのをつくつく眺めた。その連の人達もこれを眺めた。やがて又他の物を見せるつもりで、他の場所へ連れて行かうとした。然るにヤコブは母に向ひ、「もう勘し此處に居りたいと言つて下さい。これはいかにも珍らしい光景だから」

それ故又引返して、この楽しい光景を見て眼を慰さめた。

やがて次の場所へ案内されたが、そこには黄金の鐘が懸つてゐた。家の人々は基督女にそれを取り下して御覽なさいと告げて、尙ほ憊う言つた。「これはあなた方には是非無くてはならぬ物ですから、いつも面帕の裡に懸けておいて(ヘブライ)、そして天氣が悪くなつたら確くその上に立ちなさいまし」と言つた。で、一同はそれを取りおろして歎んだ。

次には山の上に案内した。そこはわが祖先のアブラハムがその子イサクを献げた處である。その日まで遺つてゐる祭壇や薪や火や刀を見せた。一同はそれを見て、兩手を舉げて、自分達を祝福して、「あゝ、アブラハムこそ、主を愛して、又己に打克つた人ですね」と言つた。

これらのものを見終つてから、愼子は一同を食堂に案内した。そこには立派なヴァジナルといふ樂器(英國にて十六世紀普通用ひ)が一對備へてあつた。愼子はそれを奏で、これまで見

せたことを次のやうな優しい歌に直した。

「エヴの林檎を示されし、

汝は氣をつけたまへかし、

天の使の昇りける、

ヤコブの梯子見せられぬ。

一つの鐘受けとりぬ。

されば汝がいと善き物を、

アブラハムのごと、捧ぐまで、

足れりと想ふことなかれ」

折しも戸を叩く者があつた。門番が開けて見ると、大勇者であつた。彼が入つて來たのを見て、一同ごんなに歡こんだか知れない。先日彼が巨人である年老いた悍猛の血塗者を殺して、獅子の危難から自分達を救つてくれたことなどが、又新しく心に浮んで來た。

大勇者は基督女と哀憐女に向つて言つた。「私の主人はあなた方の道中を慰めるために、お二人に酒を一壘と焼米と柘榴を二つ下さいました。それからお子さん達には、無花果と乾葡

荷を下さしました」

やがて彼等は暇をひして出立した。慎子と敬子は見送りに出た。門の側へ来た時に、基督女は門番に向つて、此頃通つた人はございませぬかと問ねた。

門番は言つた。「いや、唯つた一人先頃通りました。その人の話では、あなた方の通行なさる王の街道筋で大盗難があつたさうですが、盜賊共は間もなく捕まつて、間もなくお仕置に遇ふさうです」

それを聞いて、基督女と哀憐女とは怖ろしがつたが、マタイは言つた。「お母さん、怖いものですか、大勇さんが一緒に行つて、道案内をして下さるんですもの」

そこで基督女は門番に向ひ、「私が此家へ参りましてから、貴君には一方ならぬ御親切にあづかりました。子供達をも可愛がつて、御親切にして下さつて、なんともお禮の申しやうもございませぬ。これは些少なものでございますが、どうぞ、貴方を尊敬ひます表象にお受け下さいまし。」憐言言つて、門番に金天使(バンヤン時代の金貨の名にて十圓に當る)を一枚手渡した。門番は鄭重に會釋して、「あなた方のお衣裳をいつも白くなさいまし。頭には膏を絶やさぬやうになさいまし(傳道書九〇八)。哀憐女さんも御達者でゐて下さい。生命を失してはいけません。哀憐女さんの御仕

事を無にしてはいけません」と言つた。それから子供達に向つて、「なんでも若い時の慾を避けて、(テモテニ)真面目な賢い人達と一緒に信仰の心を追ひ求めなさい。さうすればお母さんはお喜びなさるし、それから真面目な人達からは讃められます」
そこで彼等は門番に感謝して、出立した。

六

さて私が夢の中で見てゐると、彼等は前に進んで、岡の端まで来た。その時敬子は何にか思ひ出して叫んだ。「あ、私は忘れ物をしました、基督女さんと連の方に進げやうと思つてゐて、私、歸つて、持つて参ります。憐言言つて騙かだしてそれを取りに行つた。敬子が去つた時に、基督女は路から少し離れた右手の森の中から、いと珍らしい妙なる歌の聲が聴えるやうに想つた。その歌の言葉は憐言である。

「生れ来しより　ながめぐみ、

わが身の上に　あらはなる。

汝が家にこそ　いつまでも、

わが住居をば 定めなん

静かに聴いてゐるとそれに答へて、慙う歌ふのが聴えるやうであつた。

「いとたふとしや、主の神、

とほにかはらぬ 主のめぐみ、

殿のごとき その真理、

幾千代までも 續かなん」

やがて基督女は慎子に向つて、その珍らしい歌の聲がどうして起るのですかと尋ねた。慎子はそれに答へた。「あれはこの國の鳥の鳴き聲です。普段は中々歌はないのですけれど、春になつて、花が咲き出で、(一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二) 日が暖たかに照るやうになりますと、朝から晩まで聴えます。私は時々その歌を尋ねて外に出ることもあります。又時には家に飼ひ馴すこともあります。あの鳥は淋しい時の好いお友達でしてね。林も森も寂しい所もあの鳥のために懐かしくなります」

折しも敬子は戻つて来て、基督女に向つて、「ごらんあそばせ、あなた方が私共の家でお見になつた事を皆なこの通り覺書にして持つて参りました。あなた方がそれを御忘れにならま

した時に御覽なさるやうにね。それを思ひ出しなされることは御心のためにも善し、それから慰さめにもなませうから」

やがて岡を下つて、謙遜の谷へ入つた。その岡は峻しくつて、路は滑り勝であつたが。能く氣を付けたので、無事に降つた。谷へ着くと、敬子は基督女に言つた。「茲はあなたの御良人の基督者さんが穢れた悪魔のアポリオンに遇つて、怖ろしい戦をなすつた處です。それに就てはあなたもお聞きになりましたでせう。でも、どうぞ元氣善くお出でなさいまし。大勇者さんが道案内をして指圖して下さるのですから、何事もありませんでせう」

慙う言つて、二人の娘は案内者の手に旅人達を委せた。案内者は前に進むし、娘達は歸つて往つた。

そこで大勇者は言つた。「この谷は恐がらないでも可いですよ。自から招かなければ、渺しも害を受けることはありません。基督者さんが茲でアポリオンに遇つて、激しい戦をなすつたことは事實ですが、そんな格闘をするやうになつたのは、あの岡を下りる時に滑つたからです。あそこで滑るど、どうしても戦はねばならなくなるのですからな。それでこの谷はさも難所のやうになつてしまひました。世の中の人、何にか怖ろしい事がどこかに起つたと

聴くと、その場所には妖怪變化が出没するやうに風評するのですがな。さういふ事が起つて來るといふのは、自分達の行爲から皆な招いたことなのです。一體この謙遜の谷といふは、地味が豊かで、鳥も飛び交ふ所です。それは兎に角、ひよつとしたら何處かこの邊に、基督者さんがどうして茲で難儀をしましたか、その理由を知らせるものが見付るかも知れません」

その時ヤコブは母に言つた。「あれ、あそこに柱が立つてます、何にか書いてあるやうね。行つて、見ませう」一同そこへ行つて見ると、「基督者が茲に來る前に滑つた事と、此所にて戰へることは、後より來たる者の警戒である」と記してあつた。そこで案内者は「御覽なさい。お話し仕た通りに、基督者さんが此所で難儀をした理由を知らせるものがありますでせう」と言つて、尙基督女に向ひ、「他の人も多勢さういふ辛い目に遇つてゐるのですから、基督者さんばかり咎めるには當らないです。この岡を下るよりも登る方が易しい位ですからな。世界中何處にもこんな岡はあまりないといふことです。それは兎に角あの善い人の話は止めませう。大膽に敵に打勝つて、安息を獲てゐるのですからな。私共は高きに在す主にお願ひして、假令試練みられても、基督者さんのやうに辛い目に遇はんやうに仕たいものです。」

「この謙遜の谷のことをもう一度お話しすれば、これほど善い豊かな地は何處にもないほど

です。地味が肥えてゐるので、御覽の通り、緑の草場が澤山あるでせう。誰でも私共のやうに夏季に初めて茲へ來れば、その美はしい景色に惚々してしまひます。どうです、この緑色の谷は。それからあの百合の花の美くしいこと（雅歌二）この謙遜の谷で善い領地を貰つてゐる勞働者も、私は大分知つて居ります。神は驕傲者を拒みて、卑下者に恵みを與ふ（ヤコブ四〇六）と言ひますからな。實に豊かな土地で、物の生熟ること夥しい程です。茲から直ぐ父の家に行けて、もうこれ以上岡や山を登下りする苦難をしたくないと思ふ者もありませんが、さう言つた所で、路は路ですから、その端まで行かないではな」

こんな事を話しながら歩いて行くと一人の童がその父の羊を飼つてゐるのに眼が着いた。その童は甚だ粗末な装をしてゐたが、その容顏はいかにも生々としてゐて、頗ぶる可愛らしかつた。唯獨り坐つて、歌をうたつてゐる。大勇者は、「お聴きなさい、あの牧羊の子供の言ふところを」と言つた。そこで皆な耳を傾むけた。童は歌ふ。

「下にをる者 落つるなし。

低きにをる者 傲るなし。

謙遜るもの かはりなく、

神のみちびき 身に受けん、

わが持てるもの 少なくも、

多くもわれは 充ち足れり。

主よ満足を 賜へかし、

それをも汝は 貯はへり。

都まふでに ゆく人は、

あまたの重荷 身にぞ負ふ、

今乏しくも 後に幸福、

これぞ世々に いとも善し」

そこで案内者が言つた。「あれをお聴きですか。あの子供は絹や天鵝絨を着てゐる者よりも、
楽しく生活をしてゐるのですせ。胸に安心草を澤山貯へてゐますからな。それは兎に角前の
談話を續けませう。」

「この谷には以前わが大君の別荘があつて、茲に居られるのが大變お好きでした。又この草
場は空気が好いものですから、こゝを散歩なさるのがお好きでした。それに茲に居れば、騒

がしく又忙がしい世の中から自由ですからな。ごこの國も騒々しく混雑してゐますに、この
謙遜の谷ばかりは空漠な寂しい所ですからな。静かに想ひに耽ることは他の場所では出来な
いことですが、茲では尠しも礙たげられることはありません。旅人の生活をお愛せぬ者の外は誰
もこの谷を通りませんからな。基督者さんが偶然にも茲でアポリオンに出遇つて、激しい戦
をなされたが、以前は茲で天の使に遇へたし（ホセヤ十二）、眞珠も見付かつたし（マタイ十三）、又
生命の言葉も見付かつたのです。」

「わが大君が以前茲に別荘を持つてゐて、茲を散歩することを愛されたことは、今言つた通
りですが、尙ほ附言したいことがあります。それは大君がこの土地を愛し慕ふ人々のために、
一年中の収入を備へて置いて、或る時季に忠實にそれを支拂ひなすつて、人々の道中の費
用を支へ、又その旅路に出るのを一層勵ましたまうことです」

さて進み行く程に、サムエルは大勇者に言つた。「伯父さん、この谷で父様とアポリオン
と戦つたさうですが、どの邊で戦つたのでせう。この谷は廣いですからね」

大勇。「あなたのお父さんがアポリオンと戦はれたのは、丁度忘勝の青野を越した處の狭い
通路で、あれあの向ふに見ゆる所です。實際彼處はこの地方で一番危険な場所です。何時で

も旅人がそんな攻撃を受けるのは、その受けた御恩を忘れて、自から重んずる心がなくなつてゐる時です。ですから、彼處では、他にも随分難儀した人があります。尙ほ彼處へ行つて、もつと精しくお話し仕ませうが、彼處には今でも戦かつた跡が残つてゐますし、又その記念碑もある筈です」

その時哀憐女は言つた。「これまで歩いて來ました處では、この谷が私に一番宜うございませわ。此所は一番私の氣に入りました。馬車の音も荷車の音もしないかういふ所は私大好きです。何にも煩わしい事のない悠ういふ所でこそ、自分の身の越し方や、仕て來た事や、大君の召呼を受けたことなどを熱々と考へられますのね。深く思へば、心は啓き、精神は融けて來て、遂にはその眼はヘシポンの池のやうに澄んで參りませう（雅歌七）涙のこの谷を通つて眞直に行く者は、茲に一つの泉を作り、又茲に在る者に神が天より降したまふ雨がその池を満すといふのは（詩八十四）此處のことなのでせう。それから又この谷は大君がかの葡萄園を興ふ（ホセア二）と仰やつた所なのでせう。此處を通る者は、基督者がアポリオンに出遇ひなすつた時のやうに、歌はねばならなくなりませう」

案内者は言つた。「眞實にさうです。私は幾度もこの谷を通りましたが、茲はご善い處はな

いです。私が案内した旅人も多いですが、皆な同様に言ひました。「我は貧しくして、心傷み、わが言葉に畏れ戦く者のみ願ひみるべし」（イザヤ六）と大君の言ひたまうた通りです」

やがて前にも記した戦闘のあつた場所に來た。そこで案内者は基督者と子供達と哀憐女とに言つた。「此所がさうです。此地に基督者さんが立つてゐると、アポリオンがあの高みから攻めかゝつて來たのです。これ、私が言つた通りこの邊の石には今でもあなたの良人の血の痕が残つてゐるでせう。御覽なさい、彼此にアポリオンの碎けた投槍の細片が轉ばつてゐます。この地面がこれほど踏み荒された處を見ても、どれほど勝敗を争つたか解ります。又この石の碎片をこらんなさい、側打を喰つて微塵に碎けたのです。實際基督者さんは茲で男らしく振舞はれました。偉い元氣を出しなすつた所は、ヘルクレスかとも想はれました。アポリオンは遂に負けて、隣の谷に逃げ込んでしまつたです。それは死の蔭の谷といつて、私共が直ぐこれから通る所です。あれ、あそこに、その戦闘と基督者さんの勝利を後の世に傳へるために彫付けた記念碑が立て、あります。それは恰度路傍にあつたので、一同その側に寄つて、記してある文字を讀んだ。その一言一句は次の通りである。

いと珍らしくも眞實なる、

激しき戦茲にありき。

基督者とアポリオンとは、

互に鎗けづりけり。

勇ましくも人は振るまひ、

魔物は遁れ去りにけり。

この石碑はわれ立てぬ、

その戦をば證すため

一同此所を過ぎて、死の蔭の谷境に來た。これは前の谷よりも長くつて、然も多くの人の證するやうに、悪い者の出沒するいと不思議な場所であつた。けれども晝間ではあるし、大勇者が道案内をしてゐるので、女達や子供達も安心してこの谷へ入つて行つた。愈々この谷に入ると、死人の呻くらしひ聲が聽えるやうであつた。いかにも大きな呻き聲である。又甚だしい呵責に遭つてゐる人々の口から出るらしい悲歎の言葉が聽えるやうであつた。かういふ事のために子供達はふるふると慄へ出すし、女達は色を失なつて眞蒼になつた。けれども案内者は一同を慰さめ勵ました。

それから少し行くと、彼等の踏んでゐる地面が下に穴でもあるやうに震ひ動くのを感じた。又蛇でも鳴くやうな聲がしたが、未だ何んにも見えなかつた。そこで子供達は言つた。「こんな寂しい所はまだ終へないでせうか」けれども案内者はこれを勵まして「足下に氣をつけて下さい。係蹄にでも引懸るといけませんから」と言つた。

折しもヤコブは病を惹起した。その原因は恐怖のためらしかつた。母親は註釋者の家でもらつた甘露酒の壺を取り出してこれに飲ませ、また老練者の調つた丸薬を三粒吞ませると、子供は元氣づいた。それから進んで、谷の中程まで來た時、基督女は言つた。「なんだか向ふに、これまで見たことがない怪しい姿のものが見えるやうですのね」そこでヨセフは言つた。「お母さん、何んですか」母親は言つた。「なんだか醜い物ですの、坊や、それは醜い物」「でも、お母さん、どんなやうな物ですか」「どんな物つて、口では言へません。もうだん／＼近くなります」と母親は言葉を切つて、「もう近くなりました」と言つた。

大勇者は「まあ、まあ、一番怖い人は私の側に密着しておるでなさい」と言つた。すると間もなく悪魔は進んで來たので、案内者はそれに立ち抗つた。然るに悪魔は間近く寄つて來ると、姿を掻き消して見えなくなつてしまつた。そこで人々はいつぞや、「悪魔を拒げ、さら

ば彼れ爾曹を遁げ去らん」(四〇七)と言はれたことを思ひ出した。

そのため妙し元氣づいて、前に進んだが、まだ遠くも行かぬ内に、哀憐女が後を振り返へると、獅子に能く似た物が猛然として随つて来るのを見たやうに想つた。凄まじい吼ゆる聲がする。それが吼ゆる毎に、谷中に鳴り渡り、又人々の心を疼ましめるのであつた。唯平氣なのは案内者だけであつた。獅子は進んで来る。大勇者は後に踏み留まつて、旅人達を皆な遣り過した。獅子は勢ひ込んで来る。大勇者はいざ来たれと身構へをしてゐた。すると獅子はその禦ぎ戦はんとする決心(ペテロ前五)を見て、後退りして、最早進んで来なくなつた。

やがて又前進した。案内者は先に立つて行つた。間もなく、路幅一杯に陥し坑の堀つてある所まで来た。それを越える仕度も出来ない内に、濃い霧と暗黒が覆ひ被さつて来たので、何にも見えなくなつた。そこで旅人達は「あゝ、私共はどうしたら可いでせう」と歎息した。けれども案内者はそれに答へて、「恐れてはいけません。靜かに立つて、事の成り行きを見てゐなさい」と言つた。人々は路が塞がつてゐるので、そこに佇立んでゐた。すると又敵の騒がしい聲や突進する音が益々明らかに聽えるやうな心地した。又坑の中から火と烟とが益々判然と見えて来た。そこで基督女は哀憐女に向つて、「今こそ私は良人の旅の苦しみが解りま

した。此所のことは種々と聞いてゐましたが、来て見るのは初めてです。良人は氣の毒でしたのね。こんな所を夜中に獨りで通りましたのですから。良人は大抵夜途をして此所を越えたのですからね。それに又群がる惡鬼に圍まれて、一寸との隙でもあれば、寸裂にされてしまつたのでせう。死の蔭の谷のことを風評する人は澤山にございます。自分で親しく来て見ませんければ、實際どんな所だか話しは出来ませぬね。心の苦しみは心自から知る、他人はその喜びにあづからず」(箴言十)とありますね。慙うして茲にゐますのは怖しいですね」大勇、「これは大水の中で働らいて、深みへ沈んで行くやうですな。海の底へ潜り込むか、山の底へ埋け込まれるやうですな。八方塞がりとはこの事ですな。暗きを歩みて光を得ざることも、エホバの聖名を頼み、おのれの神にたよれ」(イザヤ五)とありますから、私は前にも言ひましたやうに、此谷を幾度も往來して、今よりも一層辛い目に遇つたこともあるのですが、御覽の通り、今でもかやうに生きてゐます。私は何にも自慢は申しません。私を救つたのは自分の力ちやありませんから。唯主の救助を頼るばかりです。さあ、御一緒に祈つて、この暗を照し、又茲の惡魔ばかりか、地獄の有らゆる惡魔を追ひ拂つてもらひませう」そこで彼等は聲を擧げて祈つた。すると神は光と救ひを送られたので、最早その路に妨た

げがなくなつた。でも未だ谷を通り越したといふわけではない。尙ほ進んで行くと、嫌な胸悪い臭氣が甚だしく發つて来て、いかにも臭苦しくなつた。そこで哀憐女は基督女に向つて、「あの御門のことや、註釋者さんの御家や昨夜宿めていたゞいたお家のことなど思ふと、茲は又なんといふ不快な所でせう」

「でもね」と子供の一人が言つた。「茲を通るだけなら、茲に永く住んでゐるやうに悪くはないでせう。こんな路を通らなければ、私達に用意された家に行けないといふ一つの理由は、天の住家が一層心持の善いやうにといふのでせう」

「善く言ひました、サムエルさん」と案内者が言つた。「それこそ成人にも劣らない言ひ分です」

「えい、もう一度茲から出られたら」とサムエルが言つた。「私は今までよりもごんなに光と良き路を貴ぶか知れませぬ」

そこで案内者は言つた。「追々にこの谷から出ませう」

更に又進んで行く間に、ヨセフは言つた。「この谷は未だ終らないのかな」

その時案内者は言つた。「足下に御氣を付けなさい。係蹄のある所に來てゐるのでから」

それを聽いて皆な足下を見ながら進んだが、それでも係蹄には頗ぶる惱まされた。今しも係蹄のある所に來て見ると、左方の溝の中に棄てられた人に眼が着いた。その肉は悉く掻き裂れてゐる。そこで案内者は言つた。「あれは輕卒者といつて、矢張この路を進んだのですが、あゝしてもう長いこと横たはつてゐます。この者が捕まつて殺された時に、注意者といふ人が一緒にゐたのですが、その方は免れました。今までこの近所で殺された者はどれほどあるか解りません。それなのに輕々しく旅立つて、案内者も頼まないといふのはいかにも無鐵砲でさ。あの基督者さんが、茲を免れたといふのは不思議な位です。あの人は神から愛されてゐたし、その心も勇ましかつたからでせうが、さもなければ、とても無事ではなかつたでせう」

やがて漸くその谷の盡くる所に來た。恰度基督者が茲を通行した時に見た洞穴の邊に來ると、そこから一人の巨人が現はれた。それは大樵者と言つた。彼は巧い言をいつては若い旅人を欺して滅ぼすのを仕事にしてゐた。今彼は大勇者の名を呼んで、「こんな事をするのはならんとお前に幾度言つたか知れんぢやないか」と言つた。

大勇、「ごんな事をです？」

大槌。「どんな事だ。どんな事つて能く知つてゐるではないか。兎に角今日はそんな事の出來ぬやうに片付けてくれる」

大勇。「まあ、勝敗を決する前に、戦はねばならん理由を明らかにしませう」
女達や子供達はとうすることも出来ずに、ぶる／＼慄へながら立つてゐた。

巨人は言った。「お前はこの國を盗むのだ。盜賊の中で一番悪い盗み方をするのだ」

大勇者は言った。「そんな漠然たることを言はないで、もつと委しく言つてくれ」

巨人は言った。「お前は拐帶者をやるぢやないか。女や子供を集めては、知らぬ他國へ連れて行つて、わが主人の國を弱くするではないか」

けれども大勇者は答へた。「私は天の神の臣で、罪人を説き付けて悔改めさせるのが私の役目だ。私は男や女や子供を暗から光に向け、又サタンの方から神に向けるやうにせよと命せられてゐるのだ。さういふ理由で戦はうといふなら、お望み次第に、さあ、來い」

巨人は襲つて來た。大勇者は劍を抜いてこれに立ち抗つた。巨人は棍棒を持つてゐる。忽ち挑み戦つたが、最初の打撃に巨人は大勇者を倒して片膝をつかせた。それを見て、女達と子供達は泣き出した。大勇者は忽ち元氣を回復して、勇ましくも奮ひ起つて、巨人の腕に斬

り付けた。かうして一時間ばかり火花を散らして戦つたが、巨人の鼻孔から出る息は、沸ぎれる大釜の湯氣のやうであつた。

やがて二人は暫らく別れて憩んだ。大勇者は熱心に祈つた。女達と子供達とは戦ひが終るまで歎息をついたり、泣いたりするほかどうしやうもなかつた。

二人は憩んで息を吻いてから、又挑み戦つた。今度は唯一撃で、大勇者は巨人を地に打ち倒した。「待て、待て、もう一と勝負」と倒れながら巨人が言った。そこで大勇者は寛大にも巨人を起き上らせて、再び渡り合つた。巨人は大勇者の腦天めがけて微塵に碎けよとばかりに、棍棒を打ち下したが、僅かな所で誤まつた。

大勇者はそれを見て、滿身の勇氣を奮つて、つと走り寄り、第五の肋骨の下を刺し貫ぬいた。すると巨人は力衰へて、がらりと棍棒を落した。大勇者は返す刀に、巨人の首を打ち落した。それを見て、女達と子供達は大いに喜んだ。大勇者も自分を救ひたまひしことを神に感謝した。

さうしてから、その邊に一本の柱を立て、巨人の首をその上に懸けて、通行者に讀ませるやうにその下に次の文字を記した。

「この首の主こそさきに、

旅する人をなやまして、

路を遮へ切り、耻かしめ、

情け用捨はなかりけり。

旅人の道案内なる、

われ大勇は茲にその、

敵なる彼と戦かふて、

遂に打ち取る、この首を」

七

さて私が見てゐると、彼等は進んで、旅人に前途を眺めしめるために築いた小高い處に登つた。それは基督者が初めてその兄弟の信仰者の姿を見かけた處である。やがて一同そこに腰をかけて憩んだ。又茲で飲み食ひして、あれほど危険な敵から救はれたことを、互ひに祝した。憐うして坐つて喰べながら、基督女は案内者に向つて、戦の折にお怪我はございません

んでしたかと問ねた。大勇者はそれに答へて、「えい、ほんのかすり傷です。それも害にはなりません。實にそれはわが大君とあなた方に對する愛の證據ですから。後には恩寵に因りて、私の報賞を増していたく資本ともなりませう」

基督女。「でも、棍棒で打つてかゝられなすつた時には、怖くありませんでしたか」

大勇。「私は自分の能力に頼りはしません。凡ての者より強くありたまふ者に頼りますからな。それが私の義務ですもの」

基督女。「でも、彼の者に最初お打れなすつて、片膝をおつきになつたでせう、あの時はどんなでございましたか」

大勇。「あの時でも、唯大君に任せておりましたから、大君は遂に打ち勝たれました」(ロマ八)

その時マタイは憐う言つた。「そんな談話を聴くと、尙更私は神が不思議な位の善い事をし下されたことを想ひます。あの谷から私共を連れ出したり、あの敵の手から救つたりね。

あゝいふ場所、これほどまでに愛の證據を見せて下すつたのだから、もつとく神に頼りたのまないではいられませんね」

やがて一同起ち上つて、前に進んだ。

それから勢し行くと、一本の櫻の樹があつた。その側に來て見ると、一人の年老いた旅人がその樹蔭に睡つてゐた。その旅人であることは、その衣物や杖や帶の様子で解る。

道案内の大勇者はその旅人を搖り起した。すると老人は眼を開いて、叫び出した。「何用ぢや、一體誰だ、お前さんは。茲に何用があるのぢや」

大勇。「まあ、そんなに怒りなさいませぬ。あなたの友達だと言つて可いんですから」

それでも老人は起ち上つて、勢し油断せず、此の人達は一體何者だらうと身構へてゐた。案内者は言つた。「私は大勇者と言ひまして、この方々が天國へ行きなされる道案内をいたす者です」

それを聞いて老人は言つた。「それはどうも面目ございませぬ。先日薄信者の金を奪つた者がありますが、若しや貴君方はその一味の者かど危ぶみましたものですから。かうして能く能く御顔を見れば、いや、えらい正直な方々ですにな」

大勇。「それでは若し私共がその一味の者でしたら、貴老はどうしてお防ぎになるつもりでしたか」

老人。「どうして防ごとな。それは息の根の續く限り戦ひます。なほに、矢たら敗れを取

りませぬや。基督者たるものは自から屈しない限り、決して降参するものぢやございませぬ」

大勇。「成程貴老は正直な御老人だ」と案内者が言つた。「雄鶏にすれば種が善いのですな。貴老の言はれる所は眞實です」

老人。「さう言はれて見れば、私にもあなたが眞正の旅路の事を能く御存じなことが解りました。大抵の者なら私共基督者は弱蟲はないと思つてゐますからな」

大勇。「かうして御遇ひしたのは何によりです。どうぞ御名前と御郷里を聞せて下さい」

老人。「私の名は一寸困りますが、郷里は愚鈍町といつて、滅亡の市から二百四十哩ばかり離れてゐます」

大勇。「あゝあの國の方ですか。それでは大分推量が出来ますぞ。若しや貴老は正直翁ではござらぬか」

これを聞いて老人は赤面して言つた。「正直の徳を持つてゐるものではありませんが、唯正直といふ名前です。その名に應はしいやうな性質を得たいとは思つてゐますがな。それは兎に角として、貴君は私が唯其所から來たといふだけで、どうして私の名前まで推量が出来ましたかな」

大勇。「貴老のことはいつか私の主人から聞いたことがあります。主人は地の上に起ることは何んでも承知してゐますからな。それは兎に角貴老の御郷里から善い人が出るのを度々不思議に思ひました。貴君の町は滅亡の市よりも悪いさうですからな」

正直。「はい、彼處は日の目に遠いものですから、人間も冷たく無情になります。ですが、氷の山の中の人でも、一度義の太陽に照されると、その凍つた心情が融けて來ますでな。私のやうな者が實にそれです」

大勇。「成程、成程、それに相違ありません」

やがて老人は挨拶のしるしに旅人達に聖い愛の接吻をして、銘々の名を聴き、又旅に出てからの模様を尋ねた。

そこで基督女は言つた。「私の名は多分お聞及びで御座いませう。あの基督者の妻でございます。まして、この四人は私の子供でございます」

老人は基督女の身分を聴いて、それほど喜んだか知れない。雀躍して笑ひながら、幾度も祝福して言つた。

「あなたの御良人のことは種々聞いたことがあるでな。その旅行とおやりになつた戦闘のこ

どもな。お喜びなされ、御良人の名前は世の中に鳴り響いてゐますぞ。その御信仰、その御勇氣、その御忍耐、とりわけその御誠實のために、名高くおなりですな」

老人はそれから子供達の方へ向いて、その名を尋ねたので、一人々々その名を語つた。そこで老人は子供達に向ひ、「マタイさん、あなたは税吏マタイの如くおなりなさい、但しその惡に習はず、その徳を學びなさい(十〇三)。サムエルさん、あなたは預言者サムエルの如く、信仰と祈禱の人におなりなさい(詩九十)。ヨセフさん、あなたはボテバルの家にあつた時のヨセフのごとく、誘惑から遁れて、身を潔よくなさい(創世記)。それからヤコブさん、あなたは義しき人ヤコブのごとく、又主の兄弟ヤコブのごとくおなりなさい(使徒行一〇)

それから人々は老人に向つて、哀憐女がその町と親族を遺して、基督女とその子供達と一緒に來た顛末を話した。それを聞いて正直な老人は、憐れう言つた。「哀憐女さんといふお名前ですか。では、あなたは道中にどんな困難が起つても、哀憐に護送されて、遂には彼岸で哀憐の源を見てお喜びになりませう」

道案内の大勇者はその始終を聴いて、いかにも嬉しうに、にこ／＼してゐた。やがて皆な一緒に歩き出したが、案内者は老人に向つて問ねた。「あなたの地方から旅に出

た人で、恐怖者といふ人を御存じありませんか」

「はい、能く知つてゐます」と老人が言つた。「あれは志は堅い男でしたが、何に言ふにも、私がこれまで遇つた旅人の中で一番の厄介者でした」

大勇「それでは能く御存知なのですな。あの男の性質も能く呑み込んでをられる位ですか」

正直「知つてゐますとも。大の仲好ししてな。二六時中一緒に居ました。行末のことを考へ初めたのも、實はあの男でして、その時も私は一緒に居たのでした」

大勇「私もあの人を案内して、私の主人の家から天上の都の門へ連れ立つたことがありません」

正直「厄介な男でしたせう」

大勇「いかにもさうでした。でも、私は我慢に我慢をしました。私のやうな仕事をしてゐる者は、度々あゝいふ人の案内を頼まれますからな」

正直「それではどうぞあの男のことを少し聽せて下さい。あなたの御案内を受けてどんな事をやりましたか」

大勇「まあ、あの人はその行かうと思ふ處へ達しられまいと常も恐れてゐました。何に事につけ、誰かそれについて動しても反對がましきことを言ふ者があると、それをびく／＼してゐました。何んでもあの人は落膽の沼に落ちたまゝ一月ばかり唸つてゐたさうです。しかも自分の前を幾人も通行するのを見ながらです。その中には手を貸してあげませうと言つた人も多勢あつたさうですが、さうして貰はずもしなかつたさうです。さうかと言つて歸つて行きもしない。天の都!!そこへ行けぬ位なら、死んだ方が増したと言ひながら、困難に出遇ふごとに力を落して、他の人が途に棄てた藁にでも躓くといふ始末です。それは兎に角落膽の沼に長い間ぐ／＼してゐましたが、ある天氣の好い朝に、どうしてか知りませんが、その沼から這ひ上つたさうです。沼を越すことは越しても、自分ではさうとも思はなかつたせう。想ふに、落膽の沼はあの人の心にこびりついてしまつたせう。その沼を渡る處に擔ぎ廻つたのですな。さもなければあれほどに苦勞性なことは出来ませんからな。それからあの門、といへば解りませう、此路の入口に立つてゐるあの門までやつて來ましたが、餘程の間その前に立つてゐて、叩かうともしないです。門が開いてゐる時でも、後へ退つて、他の人に譲つて、自分はそこへ入る値がないものだと言ひました。で、門へはある人々より

先へ着たでしたが、皆なさつさと彼の人を置いて行つてしまつた。いつまでも立つたきり、ぶる／＼慄へてゐるのですから、可哀想な人ですな。その状を見れば、誰だつて不便に思ひます。しかし彼の人は歸らうとはしない。漸く門に吊下つてゐる槌を取つて、微に一つ二つ叩きますと、やがて門が開けられたので、又前のやうに尻込をしました。しかし門を開けた人は彼の方へ歩み寄つて、「貴君は慄へてゐなさるやうですが、何に御用ですか」と問ねました。すると其聲を聞いて、彼の人はぱつたり地に倒れて了つたので、さう問ねた人はいかにもその氣の弱いのを不思議がつて、憐れ言ひました、「平和なれ、私は貴君のためにこの戸を開けたのですから、さあ、お入りなさい、貴君は祝福されてゐるのですぞ」その言葉を聞いて、彼の人は起き上つて行きました。所が門の内へ入つても、顔を見られるのを耻かしながら、ましてな。それでも暫らくはそこで御存じのやうな待遇を受けてから、お出かけなさいと言つて、進むべき路筋を教へられ、私共の家へとやつて來ました。所で門の前に來た時のやうに、私の主人註釋者さまの家の前にぐ／＼してゐました。餘程長く立つてゐる間に寒くなつたが、訪れやうともせず、又歸らうともしない。その頃は夜長の寒い時でした。そればかりか彼の人の懐には私の主人に宛てた添書を持つてゐたのです。それにはこれは臆病な者

ですから、迎へ入れて厚く撫はり、強い勇ましい案内者をつけてやつて下さいと記してゐるのですが、それでも戸を叩くことを怖々してゐるのですからな。で、その邊で立つたり坐つたりしてゐる内に、可哀想にも、凍えて死にさうになりました。他の人々がごん／＼戸を叩いて内へ入つて往くのを見ながら、自分はびく／＼して叩けないといふのですから、よくよくの愚圖助ですな。漸くのことでは私が窓の外を眺めると、誰だか戸の外に立つたり坐つたりしてゐますから、出て行つて、何誰ですかと問ねました。すると可哀想な人は、眼に一杯涙を浮べてゐますので、その求むる所が私に解りました。で、私は家へ入つて、その趣を主人に告げました。主人は、内へ迎へ入れよと申すので、私はもう一度出て行きました。所があの人を内へ入らせるのは中々の骨折でした。が、でも漸く入りました。わが主人は不思議なほどあの人を親切に待遇された。食卓には善い食物が尠しばかりありましたが、それを分けて彼の人の木皿に入れてやられた。その時彼の人は添書を差出したので、主人はそれを讀んで、その願望を適へてあげると言はれた。暫らくそこに居る間に、幾分元氣もつくし、尠し心も慰さめられたやうでした。私の主人は至つて優しい心の方で、殊にさういふ怖がる者を撫はつて、その心を勵ますやうになさいました。兎に角に其處の寶物を見せてもらつて、

都へ上る旅仕度をしまずと、私の主人は前に基督者さんにしたやうに、良き飲料の一壺と若干の快い食物を下された。そこで私は彼の人の案内をして、一緒に出かけました。だが、彼の人は碌々口も利かずに、大きな嘆息ばかり叩いてゐました。

「やがて三人の者が殺されてゐる處へ來ると、彼の人は自分も今にかういふ最後を遂げるだらうと言ふのです。それでも十字架と墓を見つた時には、流石に嬉しうでした。停まつて少し眺めてゐたいといふので、暫らくさうしてゐる内に稍や元氣がよくなつたやうでした。やがて困難の岡へと差しかかりました。これにはさまで心を痛めず、獅子をもそれほど怖がらぬやうでした。彼の人の惱苦といふのはさういふ類の事ではなく、遂には天の都へ迎へ入れられやうかといふ心配であつたのです。

「やがて私は彼の人が承知もしない内に、優美殿に連れて行きました。内へ入いつて、其家の處女達に紹介はせますと、耻かしかつて處女達の仲間に入らずに、獨りで居たがなのです。それでも彼の人は善い談話は好きな性ですから、度々衝立の蔭で聴いてゐるやうでした。彼の人は又古い事を見たり、見た所を心に深く想つたりするのが大好きでした。其後私に話しましたが、彼の人は先きに立寄つた耳門の側の家か註釋者さまの家かに永く留まりたかつ

たださうですが、厚かましくそれを願ふことも仕なかつたのです。

「それから優美殿を出て、岡を降つて、謙遜の谷に入りましたが、私はそれまであんなに善く岡を降つた人を見ることがありません。彼の人は身を卑下することに頓着しなかつたから、あれほど幸ひであつたのでせう。想ふにあの谷とあの人の間には情の通ずる所があるのですな。彼の人の道中で一番元氣が好つたのは、あの谷に居る時ですからな。

「其處で彼の人は横になつて、地を抱き（エレミヤ哀歌三）谷に咲いてをる種々な花に接吻するのですからな。毎朝夜明に起き出でて、あの谷をあちこち散歩しました。

「それから死の蔭の谷の入口に來ると、私は彼の人もこれで駄目かと思ひました。なにも歸りたいと言ひ出したわけぢやありません。歸るのは常も嫌がつてゐましたので。唯恐怖のために死にさうなのです。『あゝ化物に捕まりさうだ、化物に捕まりさうだ』と泣き叫ぶのです。どうにも手が着けられせん。あまりに立ち騒ぐし、泣き叫びますので、若しそれを化物が聴きつけたら、却つて増長して襲つて來さうでした。

「だが、その時氣が付きましたことは、彼の人の通る間といふものは、私か前にも後にも見たことがないほど、あの谷が靜かであつたことです。想ふに敵共はその時特に主の差止めを

喰つて、恐怖者の通行する間、これに手出しをすることはならんと命令されたのかも知れませんが。

「全部話しをするのは餘り冗漫いのですから、もう一節か二節に留めておきませう。それから虚榮の市場に来ると、彼の人は市場の有らゆる人を相手に戦はうとするのです。市場の人の馬鹿らしさに彼の人があまり勃氣になつたので、二人共頭でも叩られはしないかと心配しました。それから迷魂の地では、妙しも睡むがらないです。だが、橋のない河に来ると、又弱り込んでしまひました。そこで彼の人は、自分はもう茲で溺死てしまひます。遙々慕つて來ました主の御顔ももうこれで拜むことは出来ませんと言ひました。

「茲で又甚だ奇態なことを見ました。それは河の水が嘗てそれまで見たことがないほどの時淺かつたことです。それ故彼の人は遂に渡りましたが、靴の濡れた位のものでした。それから天の門へ登つて行きましたので、私は善く迎へられるやうに願つて、暇を告げました。彼の人は「迎へ入れられたいです、迎へ入れられたいです」と言ひました。そこで私共は袂を別つたのでして、最早その姿は見えませんでした」

正直。「それでは彼の人は遂にやり遂げたのですな」

大勇。「さうです、さうです。それに就ては初めから疑ひはなかつたのです。なにしろ心の秀れた人ですから。唯あまりに常も自分を卑下してゐたので(十八)その生涯が自分の重荷となるし、又他人にも厄介をかけるやうになつたのです。彼の人は人並はずれて罪を感じ易いのですからな(リント前八〇廿一三)。他人の害になることを仕てはならぬと心配するし、正當な事でも、罪を犯すまいと思ふから、差控へることが度々あつたのですからな」

正直。「だが、それほど善い人が一生の間どうして大抵鬱々としてゐたのでせう」

大勇。「それには二つの理由があります。一つには神が賢くもさうなすつたのです。笛吹く者も、泣く者もなければなりませんからな(十六、十一、一〇)。あの恐怖者は、そのめそしくした低い音を出す人なのです。彼の人の仲間には他の樂器よりも哀しげな調子が出る一種の喇叭を鳴すのです。實際低い音は樂音の土臺だと言ふ者もありますからな。それに私は心の憂に初まらぬ懺悔は何んにもならぬと思つてゐます。音樂者が第一の弦に觸れて出すのは常も低い音で、それからあらゆる調子に移るのでせう。神が人の靈魂を鳴す時に、先づ指を觸れなざるのは、矢張その低い音を發する弦です。唯あの恐怖者の不完全なのは、その低い音の外には、その最後の目的を達するために、他の調子を出すことが出来ないことです」

(私がかやうに憚からず比喩で話すのは、若い讀者の才智を熟らすためです。默示の書にも、救はれた者を玉座の前で喇叭や縦琴を奏でて、その歌をうたふ音楽者の仲間に譬へてある。)

(默示八〇二十)

正直。「お話しによりますと、あの人は大變熱心な人でしたな。困難も獅子も虚榮の市場も全たく怖れないで、唯罪と死と地獄を怖れたといふのですからな。唯自分が天國へ入れるかといふに就て疑ひがあつた譯ですな」

大勇。「御言葉の通りです。彼の人苦しんだといふのは畢竟それからです。御觀察の通り、それは心が弱いからであつて、旅人の生活を實際にやらうといふ精神が弱いからではありません。諺にもある通り、路に立つてゐるなら、燃えてゐる木でも咬みつくのですが、彼の人の心を壓へ着けてゐる事は、誰だつて容易に振り拂ふことは出来なからな」

その時基督女は言つた。「恐怖者といふ方のお話は私に有益でございました。今まで私のやうな者は一人もあるまいと思つてゐましたが、その善い方と私とは何處か似た所がございます。唯二つの事が違つてゐますけれど、それはその方の惱みはあまり大きくつて、外に發したのでせうが、私のは心の裡に抑へてゐます。それからその方の惱みは堅く結ばれて、待遇

をするために備へられた家の戸を叩くことも出来なくしたさうですが、私は惱めば惱むほど尙ほ激しくその戸を叩きます」

哀憐女も言つた。「私の心情を打ち明けてお話ししますと、その方に似た所が私の裡にもございます。私はいつても、地獄のことを怖れてゐますし、又他のものは何にを失なつても、天國の住居を失なうことを怖れてゐますからな。それはもう天國に住居する幸福さへ私にございますすれば、そのために全世界と別れても本望でございます」

マタイも言つた。「恐怖が一つの原因となつて、私も自分の中々救はれる値はないと考へさせられました。その人のやうな善人でもさうなら、私のやうな者はその筈ですね」

「恐怖がなければ、恩寵もないんですね」とヤコブが言つた。「でも、地獄を恐れたつて、いつも恩寵があるわけではないですね。唯神を畏れない所に、恩寵がないだけは確かです」

大勇。「能く言ひました、ヤコブさん。的確當てましたな。神を畏れるのは智慧の始めて、それから始めないものは真中も終もないですからな。それは兎に角恐怖者の談話はこれで切り上げませう。お別れに慇ういふ歌をうたつてやりませう。

「恐怖者よ汝はよく、

神をば畏れ、又汝を

害なふ事を此世にて、

爲さんことをば怖れしな。

汝が怖れし地獄こそ、

他の人も亦恐るべし。

汝が智慧かける人々は、

遂には身をば滅ばさん」

さて私が見てゐると、彼等は尙ほ話しながら歩いた。大勇者が恐怖者の話を終へたので、今度は正直者が他の人の話を始めた。その人は頑固者といつた。

正直者は言つた。「その人は旅人のやうな振をしたが、なんでも此の路の初めにある門までは來なかつたやうですよ」

大勇。「貴老はいつかその人と話しをしたことがおありですか」

正直。「はい、二三度話しました。だが、いつもおれはおれたといふやうに、頑固でした。他人のことは頓着しないし、理窟にも實例にも頓着しないです。唯自分の心の向くことをし

て、その外の事は一切仕ないですからな」

大勇。「その人はどういふ主義を持つてゐましたか、御存じでせう」

正直。「その人の言ふ處によると、人間は旅人の徳を習ふと同時に、その不徳をも習ふことが出来るから、二つながら習ふ者は確に救はれるといふのでした」

大勇。「さうですか。若しその人の言ふ所が旅人の徳を分つと同時に、その不徳にも染らざるを得ないといふのなら、あまり批難することは出来ません。實際私共は絶対に不徳を免れることは出来ません。唯それを免れられるのは、私共が心を用ゐる又力を盡す状態だけですからな。だが、御話の場合にはさういふ事ではありますまい。御言葉を察しますと、その意味はその人がさうして差支へないといふ意見を持つてゐたといふのですな」

正直。「さやうです、さやうです。さういふ意味でございます。その人はさう信じて、行なつたのです」

大勇。「だが、どんな據り所があつてそんな事を言ふんでせう」

正直。「なんでも、聖書にその據り所があるさうです」

大勇。「どうぞ、正直さん。その二三個所を示して下さい」

正直。「承知しました。その人の言ふには、他人の妻を犯すことは、神に愛されたダビデもやつたのだから、自分もさうすることが出来る。又言ふには、一人以上の女を持つことはソロモンもやつたことだから、自分もさうすることが出来る。又言ふには、サラと埃及の信心深い産婆は偽言をついて、ラハブを救つたから、自分もさうすることが出来る。又言ふには弟子達は主の命だと言つて、他人の驢馬を取つたから、自分もさうすることが出来る。又言ふにはヤコブは詐偽と假扮で父の財産を得たから、自分もさうすることが出来るといふやうなわけです」

大勇。「實に言語阿鼻ですな。確かにさういふ意見を持つてゐましたか」

正直。「彼が堂々と聖書を見なさいとか、その證據を見なさいとか論ずるのを聴きました」

大勇。「世に許すべからざる説ですな」

正直。「尙ほ能くお解りになつて戴きたいのは、誰でもさうして差支へないとは彼も言ひません。さういふ事を仕た人々と同じ徳を持つ人なら矢張さうして差支へないと言ふのです」
大勇。「愈よ以つて不埒千萬ですな。昔しの善人は心の弱いために罪を犯したので。それを彼は無遠慮な心で仕ても可いといふのですな。子供が風に吹き飛ばされたり、石に躓いた

りして、倒れて泥まみれになつてゐるのを見て、彼は故意と倒れて、豕のやうに輾轉しても可いといふのですな。誰でもそれを見たら、怒の方のために眼が暗んだと思ふでせう。「彼等は聖言に従はざる故に、これに躓づく。これ彼等斯く定められたるなり」(二〇八)と記してあるのは眞實ですな。善人の徳を持つてゐるなど想つて、その惡に自から耽る者は、惡に耽つて差支へないと思ふと同じく、その徳を持つてゐると想ふのが妄想も甚だしですな。「神の民の罪を喰ふ」(四〇八)ことは、その徳を持つてゐる者の記標ではありません。又さういふ説を懐く者が實際心の裡に愛と信仰を持つことは信することが出来ません。想ふに貴者は彼に強く反對なすつたでせうが、彼はさういふ辯解をしましたかな」

正直。「彼が言ひますには、口で反對を唱へて實際にそれを行ふよりも、口で唱へる所を行ふ方が遙かに正直ですと」

大勇。「怪しからん答ですな。勿論口には斯る事に反對しながら、密かに怒に心の手綱を弛めるのは悪いことだが、罪を行つて、尙ほこれを辯護するといふは、一層悪いことです。前者は偶然に人を躓つかすこともありませうが、後者は係蹄で人を陥れるやうなものです」

正直。「この人のやうな事を口には言はないでも、この人と同じ心の者は多いですな。だか

ら、旅に行くことがいつまでも輕しめられるのです」

大勇「實際お言葉の通りなので、歎かほしいですな。だが天の神を畏れる者もその中から出て参りませう」

基督女が言葉を決んだ。「世の中には妙な説もございますのね。死する間に悔改める餘裕が充分あるなどと申す人がありますのですから」

大勇「あまり賢くありませんな。一生の旅をするのに一週二十哩も行けば善いものを、その週間の最後の時間まで旅をぐづぐづしてゐるなどいふは嫌はれ者ですな」

正直「成程さうですな。ですが自から旅人だと任じてゐる者でも實は大方そんなものですな。私は御覽のやうな老人で、もう長いこと此の路を旅しましたので、種々な事を見聞きました」

「或る人達は全世界を追ひ巻くやうな勢で出で立つても、幾日も経たない内に、野たれ死にをして、約束の地を決して見ずにしまふ者もありました。又或る人は初めは何んの約束もせず唯ぶらぶらと出かけて、一日の壽命も六ヶ敷からうと思はれた者が、遂に甚だ立派な旅人となつた者もありました。又或る人は大急ぎで駆け出したかと思ふと、暫らくすると又大忙

ぎで駆け戻る者もありました。又或る人は最初旅人の生涯を大變讀めてゐたのが、間もなくそれを悪口す者もありました。又或る人は初め天國をさして旅立つ時には、確にさういふ場所があるのだと言ひながら、もうその間際まで来た時に、後戻りして、そんな所は有りはしないといふ者もあつたさうです。又或る人はどんな敵でも恐れはしないと高言を吐きながら、風聲鶴唳にも膽を冷して、信仰も旅路も何にも彼も棄て、遁げる者もあつたさうです」

恚ういふ事を話しながら進み行くに、向ふから驅けて来る人があつた。そして「皆さん、殊に、弱い方々は生命が惜しければ、早くお逃げなさい、この前に盜賊がゐますぞ」と言つた。そこで大勇者が言つた。「それは先きに薄信者を襲つた三人の者かも知れない。よし、目に物見せてくれる」

彼が恚う言ふので、皆な進んだ。一同眼を配つて盜賊の出で来るのを油断しなかつたが、大勇者のことを聴いたか、他に獲物があるためか、盜賊は遂にこの旅人達を襲はなかつた。

八

やがて基督女は疲れたので、自分と子供達のために宿舎を求めた。そこで正直者は言つた。

「もう少し行く宿舎があります。それはガヨス（ロマ十六）といふ大變敬まはれてゐる弟子の住家です。それ故一同そこへ立ち寄ることに定めた。老人がその宿の善い風評をしたからである。やがてその門口に来たので、戸も叩かずに内へ入つて往つた。宿舎の戸は叩かないのが普通である。その家の主人を呼ぶと、主人は出て来た。そこで今夜宿めてもらへませうかと問ねた。

ガヨス。「はい、皆様が信實な方々でございませうれば。私の家は旅人ばかりお宿め申す所ですから」

基督女も哀憐女も子供達も宿舎の主人が旅人を愛する者だと聞いて、痛く歎んだ。やがて部屋を定めてくれといふと、ガヨスは基督女と其の子供達と哀憐女とに一室を示し、又大勇者と老人とに他の一室を示した。

やがて大勇者は言つた。「ガヨスさん。夕餐の仕度をしてくださらんか。この旅人達は今日は遠くから来て、疲れてお出でやすから」

「もう晩うございまして」とガヨスが言つた。「食料を買ひに出ることは出来かねますが、何んぞ有り合せのもので、御満足は出来ませんでせうか」

大勇。「有り合せのもので結構です。貴君のやうな主人なら、平素の貯へも乏しくはないでせうから」

やがてガヨスは下に往つて、好味者といふ料理人にかやうに多勢の旅人達のために夕餐の仕度をするやうに命じた。さう仕てから、再び登つて来て、慇う言つた。「やあ、皆様、善くお出で下さいました。この家で皆様をお待遇するのは何によりの歡びでございます。御晩餐の御仕度の整ひますまで、善い談話でもなすつて下さいまし。お話し相手をいたしませうから」一同それは何によりですと言つた。

そこでガヨスは言つた。「あの年かさの御婦人は何誰の奥様ですか。それからこの若いお嬢さまは何誰のお嬢様ですか」

大勇。「この御婦人は往時に旅人でした基督者といふ方の奥様です。これはその四人のお子さん達です。又この娘さんはお知合の一人で、勤めて一緒に連れてお出でになつたのです。このお子さん達はその父上を慕つて、その足跡を踏うとなさるのです。だからその父上の宿つた處か、その足跡でも見やうものなら、嬉しさに心を躍して、同じ處に宿りたがつたり、その跡を踏みたがつたりします」

そこでガヨスが言った。「この方々が基督者さまの奥様とお子さん達でしたか。私はあなたの御良人のお父様も、お祖父様も能く知つてゐます。その家筋から善い人が澤山に出ました。その御先祖は元とアンチオケ（使徒行十）に住んで居られました。先代の方々は（御良人から直接御聴きでもございませうが）皆な立派な御人物でした。私の存じてゐますだけでも旅人の主やその路や主を愛する人々に對するその態度を見ると、孰れも徳の高い勇氣のある方々でした。又御親戚の中にも、眞理のために試練を忍びなすつた方々が多いと聴きました。御良人のお出なすつた、家系の御先祖の一人であるステバノは石で撃ち殺されなすつたし、矢張り同じ家系のヤコブは劔の尖で殺されました（使徒行十）。パウロやペテロのことは申すまでもありませんが、御良人のお出なすつた家系では、昔時獅子の穴に投げ込まれたイグナシアだの、骨から肉をすたく／＼に引き裂れたロマナスだの、火刑にされたポリカルブだのがございませし、それから日中籠に吊されて胡蜂に刺し殺された人もありますし、それから袋に入れて海中に投げ込まれた人もあります。そのやうに御家中で旅人の生活を愛するために害された方や、殺されなすつた方を皆な數へることは到底も出来ません。なにはともあれ御良人にはかういふ忘れかたみの四人のお子様がおありなさるのは何によりお目出たいですな。どう

ぞお父様の御名を汚さぬやうに願ひたいものです。お父様の足跡を踏んで、お父様と同じ目的に進んでいきたい」

大勇。「いや、實際皆な未頼母しい少年でして、心からそのお父様の路を慕つてをられます」
ガヨス。「私が申しますのもそこです。それでこそ基督者さまの家族は地の面に廣がつて、益々殖えますですな。それにしても基督女さまは御令息方のお配偶になるやうな娘さん達をお見つけになるですな。さうすればお父様の御名前も御先祖の御家柄も世に忘れられませんか」

正直。「この御家柄が斷絶するやうなことがあつては残念ですな」

ガヨス。「斷絶はしないでせうが、減るかも知れません。ですから、基督女さま、どうぞ私のお勧めを用ひなすつて下さい。さうすればお家が續きますから」と言つて、宿の主人は更に言葉を續ぎ、「基督女さま、あなたのお連れのお憐女さんが茲にお出でなのは、何によりではありませんか。どうぞせう、哀憐女さんと御縁組なすつては、哀憐女さんが御承知ならば、御長男のマトイさんとお配合はせになりましては、さうなされば御子孫繁生ですからな」
そこで此の縁談は纏つて、やがてその内に結婚させることになつた。

ガヨスは尙ほ言葉を續けた。「世には御婦人方を批難する者もございますが、私はそのために辯護いたします。死と呪咀とは女によりて世に來たれり(記三)とございますが、「神はその子を遣したまへり、彼は女より生る(ガラテヤ)とあるのを見ますと、生命と健康も矢張女から世に來たのでございませう。舊約の婦人を見ましても、母親達は何れも世の教主の母とならうと思つて、子供を欲しがつたでせう。救主がお生れになつた時も、男や天使の前に、これを歡んだのは婦人達ですからな(ルカ一四十六)」。男は誰一人、僅かな金でも基督に差し上げたといふことを讀みませんが、女様は基督に従つて、その所有を盡してこれに仕へました(ルカ三)。それから基督の足を洗つたのも女です(ルカ七五〇)」。又主の御身體に豫じめ埋葬の膏を注いだのも女でした(マカ十)。それから主が十字架をさして行かれた時に泣いたのも女です(ルカ廿三)。十字架から主に従つて、その理められる墓に行つたのも女でした(ルカ廿三)。それから復活の朝初めに主を見たのも女です(ルカ廿四)。又主が死から復活られたことを初めに弟子達に知らせたのも女でした(ルカ廿四)。ですから女の方は非常に恵まれてゐるのですから、私共と同じく恩寵の生活にあづからねばならないのです」

その内に料理人は晩餐の仕度の大抵出來上つたことを知らせて、それから一人の召使に布

や木皿を並べて、又鹽麵麩を配らせた。

その時マタイが言つた。「この布だの、晩餐の前觸だのを見たら、今までよりも尙ほ腹が空つたやうです」

ガヨス。「この世には種々な役目をする教理がありますが、それに依つて貴君が天國の王様の晩餐にあづかりたいといふ願望をもつと澤山に起しなざるやうにしたいものです。説教とか、書物とか、儀式とかいふやうなものは、私共が主の家に參つてあづかる響應に較べると、食卓に木皿を並べたり、鹽を載せたりする位のところですよ」

やがて晩餐になつた。初めに揚げた肩を一皿と波打つ胸を一皿とが食卓の上に並べられた。ダビテは肩を揚げて、心を神に注いだのである。又彼はその心情の庫なる胸を波打せて、壁琴にもたれながらこれを弾でるのを慣ひとした。この二つの皿は甚だ鮮らしく美味かつたので、一同心から歡んで喰べた。

次に出されたのは、血のやうに赤い酒の瓶であつた。(申命記卅二〇十四、士師九)。そこでガヨスは言つた。「御自由に飲つて下さい。これは神と人の心を悦ばせる眞正の葡萄の汁でございませう。それ故一同これを飲んで楽しんで下さい」

次には能く粉末にされた乳を盛つた皿が出た。ガヨスは言った。「これはどうぞお子さま方に食けて下さい。成長くなりなされるやうに」(ペテロ前二)

その次に出されたのは、牛酪と蜜の皿であつた。そこでガヨスは言った。「これは御自由に召し食つて下さい。これを食べると、判断も善くなるし、悟性も強くなりますから。主が幼少さい時に召食つたのも、この食物の皿でございます。『悪を拒み、善を選ぶことを知るをえんために、牛酪と蜜を喰はん』(イザヤ七)とございますからな」

やがて林檎の皿が出された。それはいかにも善い味の果實であつた。その時マタイは言った。「林檎を食つても可いでせうか。この果實で、蛇が私共の先祖の母を惑はしたのですね」それを聞いて、ガヨスは歌つた。

林檎ぞわれら 惑はしぬ。

されど靈魂 穢せしは、

林檎にあらで、罪ぞかし。

禁制の林檎 喰ひなば、

血をば汚さん。 されどそを、

許されし時 喰ひなば、

われらの 益となりぬべし。

さねば主の鶴 教會よ。

愛に病むとき 主の酒を、

盛りし瓶より 飲めよかし。

主の林檎をば 食へよかし」

そこでマタイは言った。「私が躊躇つたのは、この前、果實を喰つて病氣になつたからです」ガヨス。「禁制の果實を喰べなすつたから、病氣におなりでしたが、主の許したまふ果實ならそんな事はありません」

こんな談話をしてゐる間に、他の皿が出された。それは胡桃の皿であつた。すると食卓に坐つてゐた誰か一人「胡桃は弱い齒を痛めますね。殊に子供の齒をね」と言つた。するとそれを聞いて、ガヨスは歌つた。

「胡桃の殻は、堅くとも、

中に核をば 保つゆゑ、

喰ふ人をば 欺むかす。

さればその穀 開けかし。

美味きものをば 得るために、

胡桃はこゝに もたらさる

碎いて食ふ ためにこそ

そこで一同いかにも楽しく、長い間、食卓に坐つて、種々な事を話した。やがて正直翁は言つた。「宿の御主人。私共が胡桃をひいてゐる間に、どうぞ、かういふ謎を解いて下さい。

「人ありて、狂へる如く思はるれ、

棄つれば、なほもそれを得ぬ」

一同耳を聳て、善きガヨスが何んと言ふだらうと思議がつてゐた。ガヨスは暫らく静かに坐つてゐたが、やがて恚う答へた。

「貧しき者に所有物あたへなば、

復も得べきぞ、その十倍を」

ヨセフはそれを聞いて言つた。「能く解きましたね。解けないかと思つた」

ガヨスは言つた。「なに、私はその方には中々慣れたものです。龜の甲より年の効ですから。貧しい者を親切にすることはわが主から學びましたが、その親切から利得のあることは経験上で悟りましたのです。散せば反りて増すべし。興ふべきを吝みて、却りて貧しきに至る」(箴言十一)。「自から富めりといへど、何にも持たぬ者あり。自から貧しといへど、資財多き者あり」(箴言十)と言つてある通りでさ」

その時サムエルは母の基督女に囁いた。「お母さん、茲は大變善い人の家ですわ。だから暫らく此家に逗留させようよ。マタイ兄さんと哀憐女さんとを茲で祝言させてから前に進みませう」

主人のガヨスは側でそれを聴きつけて、「どうぞ逗留して下さい、なあ、坊ちゃん」

そこで彼等は一月あまりも茲に滞在した。その間に哀憐女はマタイに配合された。茲に滞在してゐる内にも、哀憐女はその習慣に従がつて、上衣や着物を作つては貧しい者に與へたので、旅人達の評判を善くした。

談話は後に戻つて、晚餐が済むと、子供達は旅の疲れに、早く寢床に入りたがつた。そこでガヨスは誰か呼んで寢室に案内させやうとしたが、哀憐女は私が寢床にお連れしますと言

つた。やがて哀憐女は子供達を寢床に連れて行く、皆な快く睡つた。けれども他の者は夜通し起きてゐた。ガヨスと彼等とはそれほど意気が合つたので、別れたくなかつた。主のことや、自分達のことや、旅のことなどに談話は盡きなかつたが、謎を持ち出した正直翁は座睡を始めた。それを見て大勇者が言つた。「やあ、睡くなりましたか。さあ、眼を擦つて、一つ謎を解いてごらんなさい」正直翁は「どれ何がひませうか」と言つた。そこで大勇者はかう言つた。

「殺さんと思へば先づ打ち勝るべく、

外に生きんと思へば、先づ内に死すべきぞ」

「やあ」と正直翁が言つた。「それは六ヶ敷い謎ですな。解くのも六ヶ敷いが、行ふのは尙ほ六ヶ敷い。それはさうと、宿の御主人、宜しければ、貴君にこの役目を譲りませう。どうぞ解いて下さい。それを何がひませう」

「それは可けません」とガヨスが言つた。「貴老にかけられた謎ですから、貴老がお解下さい」そこで老人は慙ふ言つた。

罪殺さんと思ふ者



ガヨスの家に在る大勇者と正直翁

先づ打勝れよ、恩寵にて。

生きんとすれば、主を信じ、

自我を裡に死なしめよ」

「能く解けましたな」とガヨスが言った。「善い教訓と経験がその内にありますよ。先づ第一に、恩寵が現はれて来て、その榮光に人の心を征服するまでは、とても罪に反対することは出来ませんからな。それに又罪は人の心を縛る所の悪魔の索であるなら、それが弱い身体から弛めらるゝまでは、とても抵抗は出来ませんでせう。その次に、道理や恩寵の解る人なら、自分の不品行の奴隷になつてゐるやうな者のことを恩寵に満ちた活きた證據とは信じませんからな。今一寸と思ひ出しましたが、茲に一つお聞きになる値のある話があります。二個の人が旅に行きました。一人は年若く、もう一人は年を老つてゐます。若者の方は中々不品行で情慾を擲み伏せねばならぬが、老人の方は衰弱してゐるので、情慾も衰へてゐます。若者は老人と同じやうに歩調を運んでゆきますと、矢張いかにも身輕に路を行くことが出来ました。二人は一寸と同じに見えますが、孰れがその恩寵を明らかに輝やかしてゐるのでせうか」正直「それは無論若者の方ですな。若者が罪の最も大きな反抗に頭を向けてゐるのは、恩

寵が最も強い最上の證據ですから。殊に實際その半分も反抗に遇はない老人と同じ歩調を保つてゐるといふのですから。それなのに老人といふ者は兎角想ひ違ひをしてわが身を有難がるものですから。その想ひ違ひといふのは、元來自分の情慾の衰へたのを、恩寵に依つて罪に打勝つたのだと思つて、自分を欺むき易ひですから。若し恩寵に充てる老人なら、物事の失敗を澤山見て來たので、若者に忠告することも出来ませう。だが、老人と若者が一緒に出立するとすれば、若者の方にこそその心の裡に働く恩寵が最も美しく露出れますな。老人が罪を犯さぬのは、自然に情慾の力が大變弱いからです」

かういふ談話をしてゐる内に夜が明けてしまつた。

さて家の人達が起き出ると、基督女は息子のヤコブに聖書の一章をお読みなさいと言つた。ヤコブはイザヤの第五十三章を讀んだ。それが讀み終ると、正直翁は傍から口を出して、「救主が横きたる地より出づ」と言はれたり、「我等が見るべき麗はしき容なく、美しくしき貌なし」と言はれるのは、どういふ譯ですかと問ねた。

それを聞いて、大勇者は言つた。「第一の言葉は、基督の出なすつた當時の猶太の教會は殆んど宗教の潤澤と精神を失なつてゐたことを言ふのです。第二の言葉は不信者に對して言は

れたのです。不信者は我等の主の心を見透す眼を持たぬものだから、唯その外見の賤しい状態に依つて、主を判斷するのです。譬へば寶玉が質素な地殻の中に包まれてゐるのを知らぬ人のやうなものです。その一つを見付けても、それが何んだか解らぬものだから、普通の石のやうに棄て、しまひます」

「成程」とガヨスが言つた。「そこで大勇者さま、幸ひ貴君が茲にお出でになりましたのですから、朝の茶菓が濟みましたら、野原へ行つて見ませう。貴君は武術の達人ですから、必ず何にか善いことが出来ませう。茲から一哩ばかりの所に、殺善者といふ巨人がゐまして、この邊一體の王の街道を非常に荒します。その巢窟のある所も解つてをります。その巨人は盜賊仲間の親分でしてな。これさへ除いたら、この邊一體に穩かになります」

人々はこれに同意して、出かけた。大勇者は劍と楯を持つて、兜を戴いた、他の人々は槍を持つて行つた。

九

やがて一行は殺善者の居る所に來て見ると、今しも彼はその子分共が道中で引捕へて來た

弱心者といふ旅人を兩手で搦んでゐた。巨人は先づ殘らず引剝いて、それからその骨まで舐らうとした。彼は生來の人食者であつた。

やがて巨人は忽ち大勇者とその一行が武器を携へて洞穴の口に現はれたのを見つけて、何用だと怒鳴つた。

大勇。「他の用でもない。お前は王の往來から旅人を曳張り出しては、多勢殺した覺へがある。その復讐に來たのだ。さあ、洞穴から出て來い」

これを聞いて、巨人は武装して出て來て、大勇者と挑み戦つた。渡り合ふこと一時間あまりして、互ひに息を吐くために休んだ。

その時巨人は言つた。「どうしてお前はおれの領分に入つて來たのか」

大勇。「前にも言つたやうに、旅人の血を復讐するためだ」

やがて再び渡り合つた。始め巨人は大勇者を追ひ捲つたが、やがて大勇者は勢を盛り返し、満身の勇氣を奮つて、躍り掛つて、巨人の頭と横腹に斬り付けて、尙ほその武器を手から捲き落した。やがてこれを斬り殺して、その首を刎ねて、携へ歸ることにした。又旅人の弱心者を連れて、その宿舎に凱旋した。歸つて來て、その首を家の人達に示して、前にも仕

たやうにこれを晒して、今後かやうな事を企てる者の懲戒にした。

やがて一同は弱心者に向つて、巨人の手に落ちた次第を尋ねた。

するところの氣の毒な人は答へた。「私は御覽の通りの病身でして、日に一度は常も死の使者の訪問を受けましたので、これではとても家に落着いては居られないと思ひまして、旅人の生活を送ることになりました。郷里は不確の町でして、私も私の父もそこで生れました。私は全たく身體にも心にも元氣がない人間ですが、假令蟲の爬ふやうにしても、旅路に一生を過したいと思ひます。實は此の路の初めの御門に參りました時に、其處の主は厚く私を待遇して下さいまして、私の弱々しい容子や弱々しい心をお咎めなさいませんばかりか、旅で無くてならぬ品々を賜はりまして、最後の望みを遂げよと仰やつて下さいました。註釋者さまのお家へ參りましたが、非常な御親切を受けました。困難の岡は私にはあまり困難だらうといふので、一人の御臣僕に背負はれてそこを登りました。私はこんなにもろくろと歩かほか仕方がないものですから、道中で何誰も私と一緒に連れ立つては下さいませんでした。それでも旅人達から大變お世話になりました。何誰もお通り掛りの時に、私を撫はつて、弱心者の弱き者を慰さめ」(テサロニケ) たまふのが主の御意ですからなご、屬まして下さつて、前へ

お進みになりました。それから襲撃の細道へ差しかゝりますと、あの巨人に出遇ひまして、いざ勝負をせよと言はれましたが、何をいふにもこんな弱蟲ですから、ぶる／＼慄へてゐます内に、捕まつてしまひました。それでも殺されはしないと想ひました。無理やりに洞穴へ連れて行かれましたが、生きて歸るだけは歸れると信じてゐました。凡て旅人といふものは敵の手に虜になつても、心を傾けて主に頼りさへすれば死ぬことがないといふのが神の律法だと伺つてゐましたものですから。所有物を奪られるのは覺悟してゐましたが、御覽の通り、生命だけは救かりました。これは全く神の思召と貴君方のお力と有難く存じます。これから先きの難儀も思ひやられますので、私は今から走れる時には走りますし、走れない時にはそろ／＼歩き、そろ／＼も歩けない時には、腹這ひになつても進むことに決心しました。まあ、兎に角、私が専心に天國のことを想ひますのは、何により有難いことです。路は前にありますし、私の心は橋のない河の向ふにあります。御覽のやうな弱蟲ではございますかな

そこで正直翁は言つた。「貴君は數年前恐怖者といふ旅人とお知合ひではありませんでしたか」

弱心「知つてをりますことも。あの人は滅亡の市から北へ二百四十哩、私の郷里からも恰度同じほどに離れてゐる愚鈍の町の者でございます。實を申せば、あの人は私の父方の叔父でございますので、能く存じてゐる筈でございます。あの人と私とは氣質も能く似てゐますし、又身の丈こそ私よりも少し低いですが、容貌は能く似てゐます」

正直「成程さうでしたか。どうも御親類ではないかと思ひました。顔の白いところといひ、眼付といひ、言葉つきといひ、能く似てゐますからな」

弱心「私共二人を知つてゐなさる方は大抵さう申します。それから又あの人の胸の裡を察すると、私にそっくりな所がありますからな」

その時ガヨスは弱心者に向ひ、「まあ、どうぞ、御ゆつくりなさすつて下さい。恠うして飲んで御待遇するのですから。なんでも欲しいものがございましたら、ごしく／＼言つて下さい。僕共もどうぞ御自由にお使ひ下さい。何んなりと御用をつとめる仕度をしてゐますから」そこで弱心者は言つた。「それは想ひもかけませぬ有難いお情けで、雲間を洩れる日光のやうな氣がいたします。あの巨人の殺善者が私を捕まへて、最早これ以上進ませまいと決心しました時に、こんな有難い情を私に施さうとしましたのでせうか。あの巨人が私の懐中を探

りました時に、私をガヨス様の宿舎にとまらせるつもりでしたせうか。それがまあ、さうなつたのですな」

さて弱心者とガヨスがこんな話しをしてゐた時に、あはたゞしく走つて来て、門口で呼はる者があつた。「こゝから一哩半ばかりの處に、不當者といふ旅人が雷電に打たれて死んでゐます」

弱心「あゝ、あの人が殺れましたか。二三日前、茲まで来ない内に、あの人が私に追ひついて、連れ立つて行かうと言ふので、巨人の殺善者に私が捕まつた時まで一緒にゐましたが、あの人は足早に逃げてしまひました。まあ、あの人は死ぬために逃げるし、私は生きるために捕まつたやうなものですな」

「直ちに殺されんとせる者、

いと悲しき状より救はれし例あり。

神の攝理は死に向ふとも。

卑下る人の生命延せる例あり。

われ捕へられ、彼れは逃げしかど、

意地悪き手は彼に死を、われに生命を與へけり」

さてその頃マタイと哀憐女とは結婚した。又ガヨスは娘のフイベをマタイの弟のヤコブに配合せた。それから尙ほ十日の上も彼等はガヨスの家に留まつて、旅人の慣はしに従つて、その時の間を費した。

出立する時に、ガヨスは送別の宴を張つて、飲み食ひして、共に楽しんだ。さて愈々出かけねばならぬ時が来たので、大勇者は宿泊の勘定を尋ねた。けれどもガヨスはその家では旅人を待遇しても仕拂ひを受けぬ習慣であると言つた。その年中宿めて置いても矢張さうである。實は善きサマリヤ人(四、卅五)がごんな入費でも、その歸途に皆悉仕拂ひをするからと約束して行かれたので、その方から勘定を貰ふつもりだと言つた。それを聞いて、大勇者は彼に向つて恚う言つた。

「愛する者よ、爾は旅人なる兄弟にまで凡て忠信をもて行へり。彼等教會の前にありて、爾の愛を證しせり。爾ちもし神に適ふべく、彼等の旅を助けば、その行ふところ善なり(第三書六五)といふてある通りですな」

やがてガヨスは人々や子供達に別を告げた。殊に弱心者を撫はつて、途上での飲料を與へ

た。

さて一同出立する間際になつて、弱心者はぐづくしてゐた。大勇者はそれに気が付いて、「さあ弱心者さん、一緒にお出でなさい。私は貴君の案内者になりますから。他の方達と同じ心持であつて下さい。」

弱心「あゝ、私の身分相應の連がありましたらばな。貴君方は皆な御元氣で御丈夫な方ですし、私は御覽のやうな弱蟲でございますので、後からぼつ／＼參ることにいたしませう。私の種々な弱點が私にも貴君方にも仇をなすといけませんから。私はこんな弱々しい性な者ですから、他人様の耐へなされることでも腹が立つたり怖氣たりいたします。何にしろ、笑ふのが嫌ひ、派手に飾ることが嫌ひ、無益なことを尋ねられるのが嫌ひでございます。それはまだしも、他人様が自由に物事をなさるのを見ても腹が立ちますやうなわけで、なにを申しても、眞正の道の解つてゐない、無學文盲の信者でございますからな。時には主を歡ぶ人を見ましても、私にはそれが出来ないと思ふと心苦しくなりました。實に私は強い人の中にゐる弱い人でもありますし、丈夫な人の中にゐる病人でもありますし、又厄介視された燈火のやうなものです。遁げんとする者は安らかなる人の想ひには厄介視されたる燈火の如

し」(二〇五)とあります通りです。ですからどうして可いか解りません」

「ですが、兄弟」と大勇者が言つた。「私は心の弱ひ人を慰めたり、弱い人を扶けたりするのが役目ですから、是非貴君も一緒にお出でなさい。貴君を待ちもせうし、助力にもなりませう。貴君のためなら、私共の説を言ひ張つたり、私共の仕たいと思ふ事でも成るべくいたしますまい。又貴君の前で何にか不審な點について議論などはいたしますまい。貴君を後に殘して行くよりは、貴君のためならどんな事でもいたしませう(十四章)から」

さてガヨスの門口で、熱心に語り合つてゐる間に逡巡者といふ人が拐杖を着いてやつて來た。これも亦旅行く人である。

弱心者はその人を見ると、「やあ、能く茲にお出でなさいました。私は恰度今身分相應の道連がないのを歎いてゐましたが、貴君なら私の願ひ通りの人です。善く來て下さいました。善く來て下さいました。逡巡者さん、貴君と私なら助け合ふことが出来ませう」

「貴君のお連れになるのは嬉しいですな」と逡巡者が言つた。「弱心者さん、憊うしてお目にかゝつたからには、もう別れることのないやうに、拐杖を一本差し上げませう」

「いや、お志は有難うございますが」と弱心者が言つた。「私はまだ塞者でないから杖は入

らないでせう。それでも、犬でも吠えついた時に可いでせうかな」

逡巡。「わが身でも杖でも、御用に立つならいつでも仰やつて下さい。なあ、弱心者さん」

そこで人々は進んだ。大勇者と正直翁は先に立つた。基督女とその子供達はその次に進んで、弱心者と拐杖を持った逡巡者とはその後を随つた。その時正直翁は言つた。

「なあ、大勇者さん、かうしてもう路を歩いてゐるのですから、何にか今までに旅をした人の有益な話しても仕て下され」

大勇。「歡んで致しませう。多分貴君方は先きに基督者さんが謙遜の谷でアポリオンに遇れたことや、死の蔭の谷でなされたえらい難澁などをお聴きになりましたでせう。それからあの信仰者さんが淫亂女や初めの人アダムや不満足者や羞耻者といふ四人の悪者に道中で遇つたなどを、お聞き洩しはなさりますまい」

正直。「はい、皆な聴きました。殊にあの信仰者さんは羞耻者には大變弱らされたさうですな。誠に煩さい奴ですから」

大勇。「左様です。あの旅人達の言はれたやうに、彼ほど誰にでも持餘された者はないでせう」

正直。「それから、貴君、基督者さんと信仰者さんが駭辯者に遇つたのは何の邊でせう。彼も名物男でしたな」

大勇。「彼こそ己惚れた馬鹿者でしたが、その流義に従ふ者が多いですな」

正直。「さうですな。あの信仰者さんさへ欺される所でしたからな」

大勇。「さやう。基督者さんが早くもそれを看破る方法を教へたから善かつたでしたな」

こんな談話を仕ながら進み行く内に、傳道者が基督者と信仰者に遇つて、虚榮の市場で起る災難を預言した處へ來た。

そこで案内者は言つた。「此の邊で基督者さんと信仰者さんが傳道者さんに遇つて、虚榮の市場で辛い目に遇ふことを預言されたのです」

正直。「さうでしたかな。それにしても傳道者さんはどんなにその事が言ひ悪かつたでせう」

大勇。「それはさうですが、傳道者さんは二人を同様に勵ましなすつたし、それからあの二人は實に偉い、獅子のやうな人達ですな。鐵石の志でどんな事にも顔を向けましたからな。裁判官の前に立つて、動しも恐れなかつた所などは、まあどうでせう」

正直。「誠に信仰者さんは立派に苦しみを受けなすつたな」

大勇。「いかにもさうでした。それから立派な果を結びましたからな。あの人が死んだ爲めに、有望者さんやその他種々な人が悔改めたといふ事ですから」

正直。「もつと、どうぞお話し下さい。貴君は何んでも善く御存じですから」

大勇。「基督者さんが虚榮の市場を出てから遇つた者の中で、一番狡い奴は勝手者でしたな」

正直。「勝手者ですと。それはどんな人ですか」

大勇。「極めて狡い奴で、全くの偽善者です。世の風潮につれて、宗教を信じて、しかも悪賢くつてそのために損をしたり、苦しんだりすることを欲しないのですからな。その宗教の流義は時と場合に依つて變るのです。その細君といふのも矢張さういふことが得意でした。その男はどん／＼説を變へてしまつて、又それを變へる度に言ひ譯をするのです。所で私が聴きました所によると、勝手者は善くない最後を遂げたさうで、又その子供達の中にも誠に神を畏れる人から敬まはれたやうな者は一人もなかつたさうです」

折しも虚榮の市場の開かれる其町が見える所まで来た。で、その町に近づいたことを知つて、どうしてその町を通行したら可いか、互ひに相談した。慙うしたら可いと言ふ者もあるし、あゝしたら可いと言ふ者もあつた。遂に大勇者は言つた。御承知の通り、私は幾度も旅

人の案内をして此の町を通つたことがあります。で、私の知合の人にクプロのナンンといふ年老つた御弟子があります(使徒行廿一〇十六)が、その家へなら宿れます。宜しければ、その家の方へ参りませう」

「結構ですな」と正直翁が言つた。「結構でございます」と基督女が言つた。「結構でございませうな」と弱心が言つた。その他皆な同様に言つた。さてその町の外まで来た時は、もう夕暮であつた。けれども大勇者はその老人の家に往く路を知つてゐた。やがて其家へ着いて、門口で訪れると、老人は内に居て、その聲を聴くや否や、誰が来たのか解つた。で、戸を開けたので、一同内へ入つた。やがて主人のナンンは言つた。「何誰も今日はどこからお出でになりましたか」「あの親切なガヨスの家から参りましたので」と一同は言つた。「それは中々の行程でしたな。さぞお疲れでございませう。さあ、お坐り下さい」そこで一同に坐つた。

その時案内者は言つた。「さあ、皆さん、寛ろいで下さい。此家の主人は皆さんを歓迎してくれますのですから」

「さうですとも」とナンンが言つた。「歓迎いたします。何でも御入用なものを言つて下さい。出来るだけのことは致します」

正直。「私共の大きいに入用なのは、宿所と善き御交際ですが、今こそ両方も得られませう」

ナンソンの。「宿所は御覽の通りですし、善き御交際も出来ぬことはありませんまい」

「それでは」と大勇者が言った。「旅人達にその部屋を見せてやつて下さい」

「承知いたしました」とナンソンが言った。そしてそれ／＼その部屋を見せて、それから非常に立派な食堂に案内して、そこで夕餐を食べてゐる内に、やがて寝る時刻が来た。

各自その部屋に入つて、や／＼旅の疲れが癒つてから、正直翁は宿の主人に向つて、此の町には善い人々が澤山ありますかと尋ねた。

ナンソンの。「妙しはあります。善くない者に較べれば、ほんとうに僅かです」

正直。「さういふ人々の中の誰にか面會は出来ませうまいか。旅に行く者は善い人を見たいものですからな。恰度海に帆かける者が月や星の出で来るのを見たがるやうにな」

やがてナンソンが足をこつ／＼言はせると、その娘の恩恵女が現はれた。で、彼は娘に言った。「恩恵女や、お前、行つて、私の友達に言傳て下さい、それ、悔恨者さんや、聖浄者さんや、聖徒好者さんや、不偽者さんや、悔悟者さんの許へ行つてね、今晚貴君方にお目にかゝりたいといふお客様が私の家に二三人来てゐられますからとな」

そこで恩恵女がその人々を呼びにゆくと、やがて皆なやつて来た。互ひに挨拶してから、皆な洋卓の側に坐つた。

やがて主人のナンソンは言った。「御近所の方々、御覽の通り、お客様方が私の家にお出でなさいました。皆な旅の方達で、遠くからわざわざ／＼シオンの御山をさして行きなされるのであります」と言つて、基督女を指さし、「この方は何誰だと思ひなさいませうか。これは名高い旅人で、信仰者さんと一緒に私共のこの町で辱かしめを受けなすつた基督者さんの奥様で、基督女と申されます」

それを聞いて、彼等は吃驚して、愆う言つた。「恩恵女さんのお招きを受けた時に、基督女さんにお目にかゝらうとは尠も想ひませんでした。これは驚きましたが、いかにも愉快ですな」

やがて彼等は基督女に向つて、その無事を祝し、この若い方達はその良人の子供ですかと尋ねた。基督女が左様でございますと言ふと、彼等は子供等に向つて、「貴君方の愛して仕へなさる大君は貴君方のお父様にして下さつたやうに、貴君方にもして下されます。そして今お父様が安らかに生活なさる處に貴君方を連れて行つて下さいませう」と言つた。

やがて彼等が席に着くと、正直翁は悔恨者を初め、人々に向つて、この町の近頃の有様を

問ねた。

悔恨。「市場の立つ時には目を廻すほど忙しいですから。紛擾してゐる時に、私共の心と精神を紊れないやうにしておくのは中々六ヶ敷い事です。かういふ場所に住んで、私共のやうに恚ういふ事をしてゐる者は、二六時中油断がなりません」

正直。「どうです、近頃は町の人達は静穏ですか」

悔恨。「以前よりはすつと穏やかです。基督者さんと信仰者さんがこの町でどんなに扱はれましたか、それは御承知の通りですが、近頃では餘程穏やかになりました。信仰者さんの流された血は今でも町の人々の心に泌み込んでゐるのですね。信仰者さんを焼殺した後は、最早人を焼殺すなどいふことは耻かしくなつて致しません。その頃私共はうっかり街を歩けなかつたですが、今では頭を出しても差支へありません。又その頃は信者といふ名も嫌はれませんが、今では町の或る邊では（御存知の通り、この町は大きいですから）、宗教は尊敬されて参りました。恚う言つて悔恨者は人々に向ひ、「御道中はいかゞでした。どんな事がございましたか」

正直。「旅人並に私共も種々な事に出遇ひました。路が善いこともあつたし、悪いこともあ

つたし、岡を登つたり、降つたり、まあ、安らかなことはありませんでした。風は常も順には吹んし、路で遇ふ人は皆な友達ぢやありませんでした。これまでも種々辛い障礙に出遇ひましたが、これから先きもどんな目に遇ふか解りません。なにしろ昔から「善人は惱みを受くべし」と言はれてゐるのは、眞實のことですな」

悔恨。「障礙と仰やるが、ごんな障礙にお遇ひでしたか」

正直。「その事なら、案内の大勇者さんにお尋ね下され。その方が精しいお話しが出来ませうから」

大勇。「私共は三四度惱まされました。先づ基督女さんとお子さん達は二人の悪漢に惱まされて、もう少して生命を失すところでした。それから又巨人血塗者や、巨人大槌や、巨人殺善者からも惱まされました。その最後の殺善者に就ては、その巨人に惱まされたといふよりも、實は此方が巨人を惱ましたのでした。その次第は恚うでした。私共は暫らく全會の宿主ガヨスの家に宿つてゐました時でしたが、武器を用ゐる時機はないかと心懸けてゐましたので、旅人に仇なす者に邂逅ひたいと思つて出かけました。その邊に名高い奴がゐると聞いたものですから。ガヨスはその邊に住んでゐるので、其奴の出没する所を私よりも善く知

つてゐました。あちこちと種々に詮索して、遂に洞穴の口を見つけた時の嬉しさと言つたら、實に勇氣が百倍しました。その巢窟に近く往きますと、その時恰度巨人は茲に居られる弱心者さんを可哀想にも腕づくでその巢窟に曳すつて来て、生命を奪らうとしてゐました。所が私共を見ると、他にも餌食があると想つたか、弱心者さんを穴に残して、出かけて來ましたので、私共は非常な危うい場合に立ちました。巨人の勢はすさまじかつたですが、遂に地に倒れて、首を斬れて、斯る大罪を爲す者の見せしめに、路傍に洒されました。これは偽のな話で、羔の如く獅子の口を免れた人が茲に居りますから、その確實な事を保證するでせう。そこで弱心者は言つた。「それは眞實でございます。私の苦痛と慰安はそれを保證いたしました。巨人は私の骨を剔つてくれるぞと脅かしますので、私はごんなに苦しみましたか。又大勇者さまの一行が武器を手にして来て、私を救いやうとなさるのを見て、ごんなに慰さめられましたか解りません」

その時聖淨者が言つた。「旅に行く人になくてならぬものが二つあるのですな。それは勇氣と汚れない生涯です。勇氣がなければ、その路を進むことが出来ませんし、それからその生涯が放埒なら、旅人の名をすら汚すやうになりますからな」



氣落者と其娘多怖女

聖徒好者も亦言つた。「かういふ御注意は貴君方には何んの必要もないことでせうが、世の中には随分旅路を歩きながら、旅人でないやうな事を言つてゐる連中もございますな」
不偽者も恚う言つた。「それは眞實です。さういふ連中は旅の衣物も持たぬし、旅人の勇氣も持ちません。歩くにも眞直には進まずに、その足並が曲つて、一歩は内に、一歩は外に出ます。それからその長襪も後の方に外れて、ぼろ／＼になつたり、裂けたりして、主を辱かしめるですな」

「さういふ事は」と悔恨者が言つた。「旅人達の惱みになるのですな。さういふ缺點と汚穢から行く路を奇麗にしなければ、恩恵にあづかることも出来ず、又旅人の生涯を送ることも出来ませんな」

恚ういふ談話をして時を過してゐる内に、夕餐が食卓に並べられた。一同食堂に行つて、飲み食ひしたので、その疲れた身體も快くなつた。それから各自臥床に入つた。

この市場でも久しいことナソンの家に滞在した。その間にナソンの娘の恩恵女は基督女の息子のサムエルに、又その娘のマルタはヨセフに配合されることになつた。

さて此の市場は昔時と違つて、今は穏やかなので、彼等は永い間茲に滞在した。で、旅人

達は町の善い人達と多勢知合ひになつて、種々そのために力を盡してやつた。哀憐女は例の通りに、貧しい人達のために精出して働いたので、皆なその恩に感じて、これこそ信者の装飾だと讃めた。實際のところ、恩恵女もフィベもマルタも皆な甚だ善い氣質なので、人妻として澤山な善い働きをした。この女達は皆子寶が多い方であつた。それ故基督女の名は前にも言つたやうに、益々世に現はれた。

彼等が茲に滞在してゐる間に、一個の妖怪が森の中から出て来て、町の人を多勢殺した。又その妖怪は町の子供達をさらつて行つて、その子守をすることを教へた。町では誰もこの妖怪に抵抗ふ者はなかつた。その來たる音を聞くと、皆な遁げてしまつた。

その妖怪は地上の有らゆる獸に似てゐなかつた。身體は龍の如く、七つの首と十の角があつた(七〇三)。人の子供を殺すのが大好きだが、尙ほ一人の婦に自由にされてゐた。この妖怪は人々に條件を持出した。靈魂よりも生命を愛する人々はその條件を受容れて、これに服従した。

さて大勇者はナンソンの家に旅人達を訪ねて來た人々と語り合つて、此の獸を退治して、その足で割れ、その口に呑れる危険から町の人民を救ふことを約束した。

やがて大勇者は悔恨者と聖潔者と不偽者と悔悟者と一緒に武器を持つて出かけた。妖怪は初めの間非常に暴れ廻つて、大いに敵を侮どつてゐたが、人々は武術に優れてゐたので、しっかりと打ち敗つて、これを退却させた。やがて人々はナンソンの家に歸つた。

その妖怪は常も時を定めて現はれて、町の子供を奪ひ取らんとするのであつた。で、勇敢な人々はその時を見定めて、尙ほ續いてこれを攻撃した。そのため遂に妖怪は負傷したばかりでなく、塞になつて、前ほどは町の子供を荒さなくなつた。この獸が傷のために死ぬらうと確かに信する者もあつた。

この故に大勇者とその仲間とはその名が大いにこの町に響き渡つた。物の道理の能く解らぬ人々でも、この人達を敬ひ尊ぶた。従つて旅人達は此町で害を受けることはなかつた。けれども町には土龍ほごしか世間を見たことがなかつたり、獸ほごしか物の解らないやうな淺はかな人達があつて、此の人々を敬まひもせず、その勇氣と冒險を何んとも思はなかつた。

十

やがて旅人達は再び進み行かねばならぬ時が近づいたので、旅の支度をした。その事を

町の友達に知らせてやつて、旅立の相談をした。それから暫らく互ひに別れて、大君の保護を祈つた。町の人々は弱い者や強い物や、女や男に適當した物を贈つた。又なくてならぬ物を携帶させた。やがて一同前に進んだ。町の友達は都合の好い處まで見送つて、又そこで大君の保護を祈つて、袂を別つた。

旅人達は一同に進んだ。大勇者は先に立つて行つた。女子供は今や足が弱くなつてゐたが、漸く辛抱して歩いた。そのために逡巡者や弱心者は痛くその状態に同情した。

さて町の人々に暇を告げてから、間もなく信仰者が死刑になつた場所へ來た。で、そこに足を停めて、信仰者に能く十字架を忍ばしめたまひしことを神に感謝した。又信仰者が男らしく苦しみを受けたればこそ、自分達はその功德に依つてかやうに恙ないことを感謝した。それから基督者と信仰者のことを話したり、信仰者の死後に、有望者が基督者の道連になつたことなどを話したので、路は大分はかどつた。

やがて金儲の小山に着いた。そこには銀鑛があつた。デマスはそのため旅路を離れ、勝手者はそこへ落て死んだと噂される處なので、人々はこれを見て感慨に堪へなかつた。やがて金儲の小山の向ふにある古い記念碑である鹽の柱に近着いた。又そこからソドムの町と硫

黄の燃ゆる湖が見えた。で、前に基督者の訝しんだやうに、思慮あり分別のある人々がどうしてこの方へ迷ひ込んで行くのだらうと怪しんだ。又人間といふ者は他人が害を受けてもそれに餘り心を動かされぬものである。その事が愚かな眼を引着けるやうな價值のある時には殊にさうであると考えた。

今や私が見てゐると、彼等は進んで、歡樂山の此方にある川の側に來た。川の兩岸には麗しい樹が生ひ繁つてゐた。その葉は服用すれば食過に効能があつた。そこにある草原は年中緑で、安らかに臥すことが出來た (詳廿三)。

この川の側の草原に、羔の小舎の欄があつた。これは旅路を行く婦人達の嬰兒である小羊を養ひ育てるための家である。又茲には羔を憫れんで、これを預かつてくれる人が一個あつた。その人は「腕に小羊を抱きこれをその懐に入れ、乳をふくます者をやさしく導く」ことが出來た (イザヤ四)。今や基督女は四人の嫁達に言ひ聽せて、その小さい子供達をこの人に預けさせた。小さい子供達がこの水の側に住み庇はれ、助け養はれたならば、來たるべき時に何にも缺く所がないからである。この人は小羊の中に迷ひ歩いて失なはれた者があれば、再びこれを連れ戻り、傷つけられた者はこれを裹み、病める者はこれを強くするからである。

(エヒキイル卅四) 茲には食物や飲料や衣物を缺くことはないし、盜賊や追剽に襲はれる憂ひもない。この人はその預けられた一疋の小羊を失なはんよりは、先づ自から死せんとするからである。それから茲では確かに善き營養と勸言を受けることが出来るし、正しき路に歩むことを教へられるし、又それが尠なからざる恩恵であることを教へられる。茲には又佳い水や樂しい草原や、美しい花や、種々な樹木や、善い果實の樹などがある。その果實はベルゼブルの園から壁の此方に垂れてゐたのを、マタイが食つたやうなものではない。いな、それは健康でない者を健かにし、又健康な人を益々健かならしむる果實である。そこで基督女の嫁達はその小さい子供達をこの人に預けることを承知した。彼等を勵ましてさうさせたのは、それに依つて小さい子供達が皆な王の保護にあづかれるからであつた。實に茲は年の少ない子供達や孤兒の養育所であつた。

今や進み行く程に、拔道の野の側に着いた。基督者と其の同伴の有望者達が、巨人絶望者に捕へられ、疑惑城に幽閉されたのは、そこにある踏み段から此の野原に入つて行つたからである。さて一同はその踏み段に坐つて、どうしたら最も善いか、互ひに相談した。大勇者の如き人物が案内者なので、一同の勢は甚だ強かつた。この際巨人を滅ぼし、その城を毀ち、

今後茲を通行する旅人を安らかにするのが最も善い策ではなからうかと言はれた。だが、それに賛成する者もあるし、反對する者もあつた。聖くない地に立ち入るのは正當でせうかと言ふ者もあるし、目的さへ善ければ、差支へないでせうと言ふ者もあつた。その時大勇者は言つた。「唯今最後に言はれた御主張はいつでも眞實だとは申せませんが、私は罪に抗らひ、惡に打ち勝ち、信仰の善き戦をたゝかふやうに命令されてをりますので、若し巨人絶望者の如き者と戦はなければ、誰と善き戦をたゝかひませう。ですから私はあの巨人の生命を取り、疑惑城を滅ぼすことにいたします。恚う言つて更に言葉を次ぎ、「誰か私と一緒に行く方はありませんか」

そこで正直翁は言つた。「私が行きます」

「私共も行きます」と基督女の四人の息子であるマタイとサムエルとヤコブとヨセフとが口をそろへて言つた。彼等は力の逞ましい若者なので。

そこで彼等は女達を路に待せて置いた。弱心者と拐杖をついた逡巡者には、彼等が歸つて来るまで、女達を護らせることにした。假令巨人絶望者が甚だ近くに住んでゐても、路の内に居りさへすれば、小さな童でも導びけるからである (イザヤ十)

やがて大勇者と正直翁と四人の若者は巨人絶望者を尋ねて、疑惑城へと乗り込んだ。その城の門へ着くと、劇しく打ち叩いて管ならぬ音を立てた。すると年老いた巨人は門へ出て来た。その妻の疑念女も従いて来た。やがて巨人は言つた。「そんな亂暴に叩くのは誰だ。そんな叩き状をして巨人絶望者を煩はすのは何者だ」

大勇者は答へた。「私は大勇者といつて、天國の大君の許に旅人を案内する者だ。門を開けて、私を入れろ。それから戦ふ仕度をしる。お前の首を斬つて、疑惑城を滅ぼすために来たのだから」

さて絶望者は巨人のこゝ故、人間に負ける氣配ひはないと思つた。又「これまで天使にも打勝つたのだから、大勇者など怖るゝに足らず」と想つた。で、彼は身を堅めて、門の外に現はれた。頭には鋼鐵の頭巾を被り、火の胸當を着け、鐵の履を穿き、手には大きな棍棒を携さへた。そこで六名の人々は彼を圍んで、前後から打つてかゝつた。すると巨人の妻の疑念女も出て来て良人に加勢しやうとしたので、正直翁は唯だ一撃にこれを斬り棄てた。それから互ひに必死と戦つた。遂に巨人絶望者は斬り倒されたが、痛く死ぬことを嫌つた。悶きに悶いて、猫のやうに幾度も息を吹き返した。けれども大勇者はやがて止めを刺して、そ

の首を刎ねた。

やがて疑惑城を取り毀つたが、これは巨人絶望者の死んだ後なので、雑作もなかつた。けれどもそれを壊すのに七日を費した。城内で餓えて死にかゝつた氣落者といふ旅人とその娘の多怖女を見出した。この二人は生きながら救はれた。その他城内には到る處に死骸がごろ／＼してゐるし、又牢内には白骨累々としてゐるので、見るからぞつとするほどであつた。

大勇者とその同伴はこの手柄を成し遂げてから、氣落者とその娘の多怖女を保護することにした。この親子は暴君であつた巨人絶望者のために疑惑城に囚はれてゐたが、性が正直な人達であつた。そこで巨人の首を提げて、その胴體は埋めてその上に石を積み層ねた。待せて置いた人々の居る路へと戻つて、その手柄談をした。弱心者と逡巡者とはそれが實際巨人絶望者の首なのを見て、雀躍りして嬉しがつた。さて基督女は提琴を弾き、娘の哀憐女は琵琶を弾く嗜好があつたので、あまりの嬉しさに、一曲を奏でた。すると逡巡者は踊りたくなつた。そこで氣落者の娘の多怖女の手を取つて路の内を踊り廻つた。彼が踊るといつても、拐杖を手離せないのだが、それでも善く足拍子を取つた。又少女は次の歌の音につれて

いかにも美事に踊つたので、やんやと喝采された。

「疑惑の城こぼたれしとも、

絶望の巨人、首失すとも、

罪は城をば、築き直して、

巨人をまたも生かしなん」

氣落者はどうかといふに、樂の音も彼を歡ばすに足りなかつた。空腹に死にかゝつてゐるので、舞踊よりも、食物に有りつきたいのだ。で、基督女は壘を取り出して酒を與へ、又食物を整へた。そのため間もなくこの老人は我に返つて、いかに元氣が快くなつた。さて私が夢の中で見てゐると、かういふ事を終つてから、大勇者は巨人絶望者の首を取つて、それを棒の尖に貫ぬいて、基督者が巨人の領地へ入らぬやうに後から來る旅人を警告めるために路傍に建てた柱の右に置いて、その下にあつた大理石に次のやうな數行の詩を記した。

「これぞ先の日、旅人を、

脅かしたる者の首

城は毀たれ、その妻の、

疑念女とても殺されぬ、

氣落者と娘多怖女とは、

大勇者にぞ救はれぬ。

疑がふ人は眼を放ち、

眺めば心解くるらん。

蹇者の踊るを見ても、

恐怖は消えぬ、この首の」

この人達は斯も勇ましく疑惑城を襲つて、巨人絶望者を殺してから、前に進んで、やがて歡樂山に着いた。茲は基督者と有望者が種々珍らしい場所を見物して心を慰さめた所である。茲で又彼等は牧羊者達と懇意になつた。牧羊者達は前に基督者にしたやうに、歡樂山に彼等を歓迎した。

さて牧羊者達は一行の多勢なのを見て、大勇者に向つて、(彼とは元より相識れる仲なので)「やあ貴君は善い仲間を作らへましたな。何處でこの人達を見付けましたか」

そこで大勇者は答へた。

「先づ初めには、基督女と、

一群の息子と嫁よ。

北斗星のごと、極をさし、

罪より恩寵へ向かざれば、

いかでか茲にあるべしや。

次は翁の正直よ、

同じく旅に登りけり。

誠心もてる逡巡者や、

後に残るを好まざる、

弱心者ごと亦同じ。

性善き氣落者ごその娘

多怖女も來たりけり。

我等は茲に待遇を、

受くるをうるや、尙前に、

進むべきやを知らしめよ」

これを聞いて牧羊者達は言つた。「これは愉快な御同勢ですな。茲に歓迎いたしますとも、強い者でも、弱いものでも、同じやうに歓迎いたします。私共の主はいと小さき者がどんな取扱かひを受くるか、絶えず目をつけておられますからな（マタイ廿五〇四十一）。弱い者を待遇することを輕んずるわけには参りません」

憊う言つて、家の戸口に一同を案内して、「さあ、お入りなさい、弱心者さん。お入りなさい、逡巡者さん。お入りなさい、氣落者さんも御令嬢の多怖女さんも」憊う言つて、牧羊者達は案内者に向ひ、「この方達はごうも尻込みをなさるやうですから、一々お名前を呼んだのですが、貴君や他の強い方達は、どうぞ御自由にお入り下さい」

そこで大勇者は言つた。「今日私は貴君方の顔に恩寵の輝やいてゐるのを見ます。それでこそ主の牧羊者ですな。脇や肩で弱き者を推し除けずに」（エゼキヤル廿四〇廿一）その家に至る路に花を散しなされるのですからな」

やがて弱々しい人達は先に入つた。大勇者と他の人達はそれに隨がつた。席が定まると、

牧羊者達はまた弱い人達に言った。「どうぞお望みのものを言つて下さい。弱い人を扶けたり、横着な者を戒めたりするものは、茲で何んでも整へられますから」

それから御馳走は出されたが、皆な消化れ易い、味も佳く、滋養のある食物であつた。食事が済むと、臥床に入つたが、銘々に適當な部屋を與へられた。

朝になると、山は高く晴れ渡つて、日は麗らかであつた。旅人の出發前に種々珍しい物を見せるのは、牧羊者達の慣例なので、彼等が身仕度をして、茶菓を済むと、直ぐ野へ案内して、初めは前に基督者に見せたと同様なるものを彼等に見せた。

それから今度は新しい或る場所に案内した。先づ第一に見せられたのは、驚嘆の山である。遙に見渡せば、一個の人が言葉を以つてその山を顛覆さうとしてゐた。人々はそれを見て、牧羊者達にこれはどういふ譯ですかと問ねた。すると牧羊者達は答へた。「あの人は天路歷程の正篇にあつた大惠者といふ人の息子でして、彼處に居るのは、どんな困難に遇つても、信仰さへあれば(廿三、廿四)それを路から取り除けることが出来ることを旅人達に教へるためです」

それを聞いて、大勇者は言つた。「私はあの人を知つてゐますが、非凡な男です」

次には無垢の山といふ他の場所に案内した。そこには全身悉く白い装ひをした者が一人居つた。僻見者と妬忌者といふ二人の者が絶え間なく彼に泥を投げつけてゐた。然るに見よ、泥をいくら彼に投げつけても、尠しの間に落ちてしまつて、その衣物は泥を投げつけられないと同じやうに綺麗に見えた。そこで旅人達は「これはどういふ譯ですか」と言つた。牧羊者達は答へた。「これは敬神者といふ人で、あの衣物はその生涯の無垢なることを表はすのです。この人に泥を投げつける者はその幸福を憎む者です。だが、御覽の通り、泥はその衣物に尠しも付きません。世の中で眞に無垢な生涯を送る人はまたこの通りです。さういふ人を汚さうとする者があつても、その骨折は無駄です。尠しの時が経つてから、神はその無垢の光を明らかにし又その義しきを眞晝の如くならしめたまひます」

やがて又人々を案内して、博愛山に連れて行つた。そこには一個の人が一束の反物を前に置いて、それを上衣や着物に仕立て、自分の周圍に立つてゐる貧しい人に施こしてゐた。併しその反物の束は決して尠なくなかなかつた。「これはどうしたのでせう？」と人々が問ねた。牧羊者達は答へた。「これは貧しい人のためにその勞力を與へる心のある人は、決して尠しきことがないのを貴君方に見せるためです。人を濕はす者は自から濕はすのです。寡婦は預言

者に菓子を興へても、その桶の中にあるものは尠しも減ることがないといひますからな」
それから又人々を案内して、とある場所へ行つたが、そこには馬鹿者と無智者といふ二人
が黒人の身體を白くしやうと思つて洗つてゐた。ところで洗へば洗ふほど、黒くなつた。人
人はこれはどういふ譯ですかと問ねると、牧羊者達は憊う言つた。「性の悪い者はこの通りで
す。さういふ人に善い名を負はせやうと思つて、どんなに手を盡しても、結局はその人を益
益はしくするだけです。パリサイ人もその通りでしたが、凡ての偽善者も矢張同様です」
その時マタイの妻の哀憐女はその母の基督女に向つて、「御母様、この山に普通地獄の抜道
といはれてゐる穴がありますさうですね。それを見物出来ないでせうか」。そこで母親は牧羊
者達にこの事を話した。牧羊者達は山の中腹にあるその入口へ行つてその戸を開いて、哀憐
女に暫らく耳を澄してお出でなさいと言つた。で、哀憐女は耳を傾むけてゐると、誰かは知
らず、「あゝわが産みの父親が恨めしい。私の足を縛つて、平和と生命の路に行かせないのだ
から」と言ふのが聴えた。又他の一人は言つた。「あゝもつと早くすたくゝに裂れたら、生命
を救ふために靈魂を失なうこともなかつたらうに」。又他の一人が言つた。「もう一度生れるな
ら、こんな所に来ないやうに、自分の慾を制しやう」。かういふ聲がすると同時に、哀憐女の

立つてゐる地が呻いて震へたので、彼女は蒼くなつて、ふる／＼慄へながら、「此處から救は
れる男女は幸はひなことです」と言つた。

牧羊者達は人々にこれらの事を示してから、連れ歸つて、その家で出来るだけの待遇をし
た。然るに哀憐女は年若い妊婦なので、そこで目に着いたものを欲しいのだが、耻かしがつ
てそれを言ひ出すことが出来なかつた。母親は哀憐女が打ち沈んで見えるので、どこか悪い
ですかと尋ねた。で、哀憐女は言つた。「食堂に姿見がかゝつてゐましたでせう。あの姿見が、
どうしましてか、私の心を離れませんの。ですから、あれを戴だきたいと思ひますのですが、
さうしませんと、流産するといけませんから」

それを聞いて、母親は言つた。「牧羊者達にその事を話して見ませう。拒否は仰やるまい」
けれども哀憐女は言つた。「あの方達にそんな事を知られるのは耻かしくございますわ」

「いえ、耻かしくはありません」と母親が言つた。「さういふものを求めるのは美德です」

哀憐女は言つた。「それなら、お母さん。どうぞ、牧羊者達に、あれを賣つて下さるやうに
言つて下さい」

さてその鏡といふのは世にも珍らしい品であつた(ヤコブ一〇廿三、コリント)それを一方から

見ると、その人の姿が鮮やかに現はれるし、又他方から見ると、旅人の主の顔と姿がありあり見えるのであつた。然り、この鏡を眺めて、主の頭にいたゞかれた棘の冠を見たといふ者もあるし、その手や足や脇腹にある釘跡の穴を見たといふ者もあつた。然り、この鏡には尙ほ一ついとも優れたことがあつた。それは人がこの鏡に對して主を想へば、主の生きたまふ姿でも、死したまへる姿でも、地に在す姿でも、天に在す姿でも、身を卑しくせられし状態でも、身を揚げられし状態でも、苦しみを受けるために此世に來たりたまふ状態でも、支配するために此世に再臨したまふ状態でも、その想ひ通りな主の姿を見られるのであつた。

やがて基督女は一人で牧羊者達の許に行つた。(その牧羊者達は知識者、経験者、警醒者、至誠者といつた)。そして憊う言つた。「私の嫁に、唯今妊娠の女が一人ございまして、御家で見かけましたものを欲しいとか申して居るのでございます。それを下さりませんと流産でもいたしはせぬかと氣配はれます」

經驗。「では、その方をお呼び下さい。私共の力に及びますことなら、そのお望みをかなへますから」

憊う言つて、哀憐女を呼び迎へて、「哀憐女さん。貴女の欲しいと仰やるものはどんなもの

ですか」

哀憐女は顔を赧めて、「あの食堂にかゝてゐます大きな鏡でございます」

それを聞いて、至誠者は走つて行つて、鏡を取つて來て、歡んでそれを與へることを承知した。哀憐女は頭を下げて感謝して、憊う言つた。「これで貴君方の御眼に私が惠まれてゐますことが解りました」

牧羊者達は他の若い女達にも、それ／＼その欲しがるものを與へた。又その良人達が大勇者と一緒に巨人絶望者を殺し、疑惑城を毀したので、その褒美を澤山與へた。

牧羊者達は基督女の頭に首環をはめてやつた。四人の娘達にもさうした。又その耳には耳環をはめ、額には寶玉を飾らせた。

人々はもう御暇をしいと言ふので、牧羊者達は平和に行かせることにした。けれども前に基督者とその同伴にしたやうな警戒をこの人々には與へなかつた。その理由はさういふ事に能く慣れてゐる大勇者が道案内をしてゐるので、どんな危険が近着いても、直接適宜な警戒を與へることが出来るからである。基督者とその同伴とは牧羊者達からさういふ警戒を受けても、尙ほいざといふ場合にそれを應用することが出来なかつた。であるから、今この一

行は他の者よりも便宜であつた。

十一

やがて歩きながら、慍う歌つた。

「見よ旅人にふさはしき、

救助は妙に仕組まれぬ。

障碍なしに迎へられ、

來世は我等が目標ぞ。

樂しき生活なせよとて、

珍らしき物與へらる。

何處へ行くも示せとて、

それらのものを賜はりぬ」

牧羊者達に別れてから間もなく、先きに基督者が背教の町に住んでゐる變心者といふ者に
出遇つた場所に来た。道案内の大勇者は人々に基督者のことを思ひ出させるために慍う言つ

た。「こゝは基督者さんが脊中に叛逆の文字を貼れた變心者といふ人に遇つた處です。その人
といふのは、人の忠告などに耳を貸しませんで、一旦墮落すれば、いかに諭しても止め度が
ありません。彼が十字架と墳墓のある所に来かゝると、一個の人がそれを見さしてやらうと
したが、彼は齒かみをしたり、足を踏み鳴したりして、どうしても郷里に歸るつもりだと言
ひ張つたさうです。耳門へ来る前に、傳道者に遇ふと、傳道者はもう一度引返すやうに、彼
の頭に手を按うとしたが、それでも強情を張つて、種々傳道者に失禮な事をして、遂に垣を
乗り越して、その手を通れたさうです」

やがて人々は進んだ。そして先きに薄信者が盜賊に遇つた場所に来ると、恰度そこに一人
の男が劍を抜いて立つてゐた。その顔は血だらけであつた。それを見て大勇者は言つた。「貴
君は何誰ですか」

その人は言つた。「私は眞理剛者といふ旅の者で、天の都へ參らうとしますが、今この
路で、三人の者が私を取り圍んで、三つの個條を持ち出しました。それは(一)その仲間の一人
になるか(二)言(三)もなければ茲から歸るか(三)もなければ茲で殺されるかといふので
す。それに對して、私は先づ第一の個條に答へました。第一に、私は久しい間眞正の男子で

あるので、今更盜賊の仲間入りは想ひも寄らんことです。それでは第二の個條はどうだと彼等が言ひますので、私は言つてやりました。私が出て来た郷里が不便な土地でなければ、何にもそこを見棄てはしない。全たく私に適してをらす、又私に甚だ不利益なので、見棄て、此路に來たのである。さう言ふと、それなら第三はどうかと彼等が問ねましたので、私は又言つてやりました。私の生命は大切だから、そんな輕々しく棄てるわけにはゆかない。何にもお前達から兎やかく言はれる因縁はない。そんな差出口を利くご容赦はせぬぞ。そこで三人の者、即ち粗大者、輕卒者、世話焼者は劍を抜いて私に撃つて掛つたので、私も亦劍を抜いて拒ぎ戦ひました。三人を相手に三時間あまりも戦ひましたかな。そして私もこの通り數個所に傷を受けましたが、三人にも手傷を負はせてやりました。今しがた三人は行つた所ですが、風聲鶴唳とは善く言つたもので、貴君方の足音を聞きつけたらしいです。だから逃げ失せたのでせう」

大勇。「三人に一人とは大變でしたな」

真理剛。「實際です。だが、敵の多寡などは、眞理を味方にする者などは何んでもないです。『縦ひ軍人營をつらねて、我を攻むるも、わが心おそれじ。たごひ戦ひ起りて我を攻ると

も、我はなほ侍あり』(詩廿七)。とありますからな。それに私は或る書で、唯獨りで一軍と戦つた人のことや、驢馬の腮骨で多勢を殺したサムソンの事などを讀みましたからな」

そこで案内者は言つた。「どうして大きな聲をして、誰かに加勢を求めませんでしたか」

真理剛。「それは大君に求めました。大君は私の求めを聽いて、見えざる援助を與へて下さるからな。私にはそれで充分です」

それを聞いて、大勇者は眞理剛者に向ひ、「貴君のその振舞は天晴ですな。どうぞ貴君の劍を見せて下さい。で、それを見せると、大勇者は手に取つて、暫らくそれを眺めてゐたが、やがて、「うん、これは正銘のエルサレムの劍ですな」

眞理剛。「さうです。かういふ劍を一振持つてゐて、これを用ゆる腕前があれば、どんな敵にでも向ふことが出来ますし、又使ひ方が解つてをれば、それを持つてゐても心配はありません。その焼刃は決して鈍りません。肉でも骨でも靈魂でも精神でも何んでも切れます

(ヘブライ)

大勇。「貴君は餘程長く戦ひなすつたでせうに、能く疲れませんか」

眞理剛。「それは劍が手に粘り着くまで戦ひましたさ。劍が手から生えたやうに一緒に固着

ひてしまつて、血が指から流れるやうになりますと、最も勇ましく戦ふことが出来ました」
 大勇。「善く戦ひなすつた。罪を争ひ拒ぎて血を流すことは貴君のことです（ヘアライ）。私共は貴君に力を添へますで、さあ、一緒に参りませう。互ひに伴侶になりませう」
 人々は彼を撫はつて、その傷を洗ひ、又その元氣をつけるために、所持してゐる飲料などを與へて、やがて一緒に進んだ。

さて大勇者はこの人と道連になつたのを歡こんだ。その腕前の優れたのを見て、大いにこれを愛したからである。又自分は弱々しい人達と一緒になので、この人を得て、心強くなつたのである。で、種々なことを彼に尋ねた。第一、その國元はどこですかと言つた。

眞理剛。「私は暗黒國の者でして、そこで生れました。私の父母はまだそこに存命してをります」

「暗黒國です」と案内者が言つた。「それでは滅亡の市と同じ海岸に在る所ちやありませんか」

眞理剛。「はあ、さうです。私が旅に出た譯といふのは憊うです。或る時實話者といふ人が私共の地方に來まして、基督者の仕たこと、即ち滅亡の市から妻子を棄て、去つて、旅人

の生活をなすに至つたことを話してくれました。道中で蛇に襲はれてそれを殺したことや、又その志せる處に遂に達したことなどを精しく話しました。それから主の宿に着く度に厚く歓迎されたことや、殊に天の都の門へ着いた時に非常な歓迎を受けたことを話しました。その人の言ふ所に據ると、輝ける者の仲間が、喇叭の音につれて基督者を出迎へたさうです。それから都中の鐘が彼の到着を祝ふために鳴るし、又彼は黄金の衣裳を着せられたさうです。その他種々な事を話されたが、一々茲には申しません。要するにその人から基督者としての旅行の話を聴きまして、私の心は燃え立つやうに、その後を追ふて行きたくなつて、父や母の禁めるのも聞かす、遂に家を抜け出して、遙々茲まで來ました」

大勇。「あの耳門からお出でになつたでせうね、さうですか」

眞理剛。「さうです、矢張その人が耳門からこの路に入らないと、何んにもならぬと言ひましたから」

「さうです」と案内者は基督者を顧りみて、「貴君の御良人の旅路の風評は遠近に知れ渡つてゐますな」

眞理剛。「え、この方が基督者さんの奥様ですか」

大勇。「さうです。それからあの四人の若い方達が息子さんで」

真理剛。「それはそれは。矢張旅にお出でになるのですな」

大勇。「さうです。基督者さんの後を慕ひなすつてな」

真理剛。「それは何により嬉しいことです。あの善い人は戸券と一緒に行かなかつた人達が後から慕つて来て、天の都の門へ入つたら、どんなに嬉しいがるでせう」

大勇。「それは勿論あの人には愉快ですな。自分が天の都へ入つた嬉しさの次には、そこで妻子と遊ぶ嬉しさでせうな」

真理剛。「談話の傳手ですから何がひますが、どうぞ御意見を聴いて下さい。天の都に入るに、私共は互ひに見分けがつかなくなるといふ者がありますが、どうでせう」

大勇。「そんな考へを持つてゐる人でも、天の都へ入つても、その人自身の事は解ると想ふでせう。又その人自身が祝福を悦ぶことが出来ると思ふでせう。既に自身のこと解るし、又自身が祝福を悦ぶとすればどうして他の人が解らないでせうか、又他の人の祝福を悦ぶことが出来ないでせうか。それから夫婦親子などは第二の自分ではないですか。元より天國ではさういふ關係は溶けてしまひませうが、それでも天國で親子夫婦の見分がなくなると思ふ

よりも、そこで遇つて互ひに悦ぶと思ふ方が道理に合つてゐるやうですな」

真理剛。「それで御意見が解りました。そのほか私が旅に出たことについてお問ねになることがありますか」

大勇。「ではお尋ねしますが、御両親は貴君が旅人となるのを御承知なさいましたか」

真理剛。「いや、どうしまして。私を家に引き止めやうと思つて、種々な手段を盡しました」

大勇。「それは又どんな事を言ひましたか」

真理剛。「旅などは怠け者のする事だと言ひました。ぐらくした怠け者になりたくなければ、決して旅人などになりたがるものではないといふんです」

大勇。「その他にはどう言ひましたか」

真理剛。「それから危険な路だと言ひました。旅人の行く路は、世界で一番危険な路だと言ひました」

大勇。「この路がそれほど危険なことを説明しましたか」

真理剛。「えい、種々細かいことを」

大勇。「例へばどんな事ですか」

真理剛「基督者さんが溺死かゝつた落膽の沼のことや、耳門を叩いて入らうとする者があると、ベルゼブルの城からこれを射殺さうとする弓手のことや、森や暗い山のことや、困難の岡のことや、獅子のことや、血塗者、大槌者、殺善者といふ三人の巨人のことなどを話しました。それから又謙遜の谷に穢れた悪鬼の出没することや、基督者とその悪鬼のためにもう少して生命を奪られる所であつたことなどを申しました。それから死の蔭の谷を通らねばならぬぞ。その谷には妖怪が居るぞ、光がなくなつて眞暗だぞ。路には係蹄や坑や窠や彈機が一杯だぞと言ひました。それから巨人絶望者のことや、疑惑城のことや、旅人がその巨人に遇へば必らず殺されることなどを話しました。それから危険な迷魂の地を通らねばならぬぞ。それを越えても、まだ橋の懸つてゐない川があるぞ、その川は此岸と天國の間にあるのだぞと申しました」

大勇「それだけでですか」

真理剛「いや、まだあります。この路には欺むく者が澤山待伏せして、善人を路から連れ出さうとしてゐると言ひました」

大勇「どうしてその事を説明しましたか」

真理剛「世才氏といふ人が待伏せして欺むかうとしてゐることや、虚禮者や偽善者がいつも路に居ることや、勝手者や駄辯者やデマスが私を捕へやうと思つて押し寄せることや、諂らふ者が網で私を捕へやうとすることや、それから又青二才の無學者と同じやうに、私が都の門へ行つても、そこから岡の中腹にある穴に送り返されて、その抜道から地獄に送られるだらうと言ひました」

大勇「それだけでも、充分人を落膽させますな。だが、それで最終ですか」

真理剛「いや、まだです。それから又昔からその路に出かけて、餘程遠くまで行つた人も多くあるが絶えず風評に登る榮光などは何にも見出さずに、空しく歸つて来て、その路に一足でも足を踏み出したことを馬鹿くしく思つてゐると言ひました。例へば強情者だの、柔弱者だの、疑惑者だの、憶病者だの、變心者だの、年老いた無神者だの、その他種々の名を擧げました。この人達の中には、餘程遠くまで行つて、榮光を見つけやうとしたが、誰一人として一本の羽の重さはどの利益をも見つけなかつたと言ひました」

大勇「尙他に貴君を落膽させるやうなことを言ひましたか」

真理剛「さうです、恐怖者が旅に出たが、路が寂しくつて、一寸も楽しい時がなかつたこ

とや、又氣落者が餓死をしさうであつたことや、それから（私は殆んど忘れてゐましたが、基督者その人も天國の冠を獲たといふので大評判になつてゐるが、實際は黒い河に溺れて、そこを越すことが出来ずに、死んでしまつたさうだと言ひました）

大勇。「そんな事を聽いて、貴君は落膽しましたか」

真理剛。「いえ。そんな事を何んとも思やしません」

大勇。「それはどうしてや」

真理剛。「私は實話者の言つたことを信じてゐましたので、どんな事を言はれても惑ひませんでした」

大勇。「それは貴君の信仰の勝利でした」

真理剛。「さうでしたな。私は信じてゐますので、慙うして出かけて来て、有ゆる敵と戦ひました。信じたればこそ茲まで來たのです」

(一) まことの勇氣 持てるもの、

茲に來たりて ためし見よ。

雨と風とは 絶え間なく、

吹き荒むべし この路に、

されど元氣を 挫くなく、

一度誓へる 所をば、

貫ぬかざれば 止むべしや、

旅人たるの、こゝろざし。

(二) 悲しくつらき 話をば、

身のまはりに 置かることも、

なごかそのため 迷ふべき、

力はなほも 増すばかり。

いかで獅子をば 怖るべき、

巨人どゝもに 戦かはん、

かくてぞ彼は 持つべきぞ、

旅人たるの その權利。

(三) 穢れし惡鬼 妖怪も、

いかで挫かん その元氣

途には生命 繼ぐことを

知る者いかで 赫すべき

空しき想 飛び去らん

人の言ふこと 怖れんや

夜晝彼れは 努めなん

旅人たるの こゝろざし

十二

折しも迷魂の地に着いた。その空氣は自然に睡氣を催ふさしめるのであつた。さうしてそこには一面に荆棘が生ひ茂つてゐた。そこ彼處を切り拓いて、迷魂の小亭が建て、あつた。人がそこに座るか、睡るかすれば、再び今生に目を醒して起き出るかどうか、それは疑問である。それ故人々は一列になつてこの森へ進んだ。大勇者は道案内なので、先きに立つて進んだ。眞理剛者は殿となつた。悪鬼や龍や巨人や盜賊が後方から襲ふて來て、害をなす

やうなことがあつてはと、その萬一を慮はかつて、護衛したのである。一人々々抜いた劍を手に提げて、進んだ。皆な茲が危険な場所であることを知つてゐたからである。又出來るだけ互ひに勵まし合つた。大勇者は弱心者に直ぐ自分の後から續くやうに指圖した。氣落者は眞理剛者の直ぐ眼の前を歩かせることにした。

まだ遠くも行かない内に、濃霧と暗黒とが人々を包んでしまつた。餘程長い間は互ひの姿も見えなかつた。で、暫らくは前を見て進むことが出來ないので、餘義なく互ひに呼び交はす言葉を頼りにして進んだ。茲は最も強い人達もあはれに行きなやんだのであるから、まして、足も心も弱い女や子供達はどんなに辛かつたのであらう。けれども先きに立つ人と後から來る人に勵まされて、覺束なくも路を辿るのであつた。

又茲では路が泥濘つて悪いので、甚だ疲れ易かつた。それに此の土地には一軒の宿舎も飲食店もないので、弱々しい人達を慰ませることが出來なかつた。それ故ぶつ／＼言ふ者もあるし、顔を膨らす者もあるし、嘆息をする者もあつた。それと同時に叢林に轉ぶ者もあるし、杖を泥に取られる者もあるし、又子供達の中には、泥濘で靴を失くした者もあつた。「もう力が盡きてしまつた」と一人が叫べば、「おゝい、貴君は何處に居るのです」と他の一人が叫ぶ

し、又「叢林に強く引懸つてしまつて、抜け出ることが出来ません」と第三の人が叫んだ。やがてとある小亭に着いた。それは暖かで、旅人の疲れを慰めるにいと適はしかつた。その屋根は立派に造られ、緑の葉で飾られ、又腰掛や長椅子が備へ付けてあつた。又疲れた人が凭りかゝるやうに、一つの柔らかな寝椅子もあつた。旅人達は既に路の悪いのに惱まされてゐたので、これはどう考へても、誘惑であつた。けれども誰一人そこに入つて慰みたいと言ひ出す者がなかつた。それは多分人々が絶えず案内者の忠告を善く守つたからであらう。又案内者は危険な場合に立ち至ると、その危険とその性質とをいと忠實に人々に話すのであつた。若し人々が危険の間近にある時には、常もその精神を鼓舞し、互ひに内の慾を拒むやうに奨励させた。さてこの小亭は怠惰之友と呼ばれて、實は疲れて慰みたがつてゐる旅人を誘ふために造られたものであつた。

やがて私が夢で見てゐると、人々はこの寂しい土地を進んで、とある場所に着いた。そこでは兎角人が路を踏み迷ひ易かつた。さて明るい内なら、案内者は邪まの路に迷ひ込まぬやうに充分人々に語ることが出来たのであるが、今しも暗黒なので、暫らく當方に暮れた。けれども彼は天の都に往復する路の地圖を懐中してゐた。で、火を擦つて（彼は何處へ行くにも火打箱を携さへてゐたので、その地圖の書を披けて見ると、そこから用心して右手の路に向ふやうに記してあつた。若し茲でこの地圖を見ることに氣が付かなかつたら、多分人々は皆な泥の中で生命を落したであらう。實は人々の少し前には、最も綺麗な路の端に、一つの坑があつた。その坑には泥が一杯に詰つてゐるので、どれほど深いか、誰も知つてゐない。それは旅人を殺すために掘られたものであつた。

その時私（夢見る作者）は窃かに「旅に行く人は誰でも、當方に暮れた場合に、進むべき路を見出すために、恠ういふ地圖の一つを携帶したいであらう」と想つた。さて人々はこの迷魂の地を去つて、他の一つの小亭のある處に來た。それは街道の傍に建てられた。さうしてその小亭には、不注意者と無謀者といふ二人の者が横たはつてゐた。この二人は遙々旅して茲まで來たのだが、旅の疲れを休めるために其の中に座つてかやうに熟睡して倒れたのである。旅人達はそれを見て、眠れる者の淺ましさを憐れみて、靜かに立つて首を振つた。この二人を睡らしたまゝにして立ち去らうか、それとも側に寄つて呼び醒して見やうか、人々はその爲すべき所を相談した。遂に若し出来るならば、側へ行つて起すことに決めた。けれども自分もその小亭に座らぬやうに、又その種々並べてある誘惑にかゝら

ぬやうに互に用心することにした。

そこで小亭に入つて、二人を呼び起した。案内者は二人を知つてゐたので、その名を呼んで見たが、聲も立てねば、答も仕なかつた。案内者は二人を揺動つたりして、種々手を盡してこれを起さうとした。するとその一人は「金が取れたら、お前に拂うさ」と言つた。それを聞いて案内者は頭を振つた。又他の一人は「刀を手に握れるだけ、おれは戦ふぞ」と言つた。それを聞いて、一人の子供は笑つた。

そこで基督女は言つた。「これはどういふ譯でせう」

案内者は言つた。「なに、寝惚けて喋舌るのです。お打ちなさるなら、この二人を打つてごらんなさい。あなたがごんなに爲すつても、矢張こんな風に喋舌りますから。昔もかういふ人があつて、海の波に打たれ、船の帆柱の上に偃す者のやうに睡つてゐた時に、「われ醒めなば、また酒を求めん」(箴言廿三、廿五)と言つた通りです。睡つてゐながら、なにか喋舌るのです。その言葉は信仰や道理に依つて支配されてゐないので。その旅に出たこと、茲に腰をかけるといふのが、既に辻褓が合はぬやうに、その言葉といふものは尠しも辻褓が合ひません。兎に角これは不幸です。不注意な者が旅に出ると十中の八九は恚ういふ破目になりま

す。この迷魂の地といふのは、旅人に敵對する者の最後の隠家の一つですから。御覽の通り、もう旅路の盡る所にあるので、敵にとりては一層便利です。敵の方では、馬鹿者は疲れたら必條茲に坐りたがるだらうと思ひませう。それに旅路も終らんとしてゐるので、疲れてゐるに相違ありませんから。だからして、迷魂の地はベウラの地に近く、又旅人の馳場の終りに近く置いてあるのです。なんでも旅人は用心するに限ります。さもないと此の二人のやうに、睡眠に落ちて、誰も呼び起すことが出来なくなりまますからな」

それを聞いて、旅人達は身を慄はせて、早く前に進みたがつた。殊に残りの路を行くに提灯の光を借りるために、火を點すことを案内者に乞ふた(二〇十九)で、案内者は火を點した。暗黒は非常に甚だしかつたが、その光に助けられて、残りの路を進んだ。けれども子供達は痛くも疲れて、路をもう少し安らかならしめたまへと旅人を愛する主に叫んだ。そのために尙ほ少しの間進むと、風が起つて、霧を散したので、空氣は少し透明になつた。それでもまだ迷魂の地の外には出なかつた。唯互ひに少し安き心地をして、路を歩むことが出来た。今やこの地の端に出やうとする頃、前途に當りて、痛く惱める人の嚴かな聲が聴えた。人は進み寄りて眺めるとその想ひし通りに、一個の人が跪づいて、兩手を眼の上に舉げて、

天に在す者に熱心に語つてゐるのであつた。人々は側に寄つたが、その言ふ所が解らなかつた。で、その終るまで、静かに待つてゐた。やがてその人は語り終ると、起ち上つて、天の都をさして駆け出した。そこで大勇者は彼に聲をかけて、「お待ちなさい、一寸ど、天の都へお出でなさるなら、御一緒に参りませう」その人は立留つたので、人々はその側へ行つた。正直翁はその人を見るや否や、「やあ、私の知つてゐる人でさ」と言つた。眞理剛者は、「さうですか、何誰です」と問ねた。正直翁はそれに答へて、「矢張私の郷里から来た者でして、名を不屈者といひます。確に善い旅人です」

やがて互ひに側に來た。すると不屈者は直ぐ正直翁を認めて、「やあ、正直翁もそこにお出でいなすな」

「さやうぢや」と正直翁が言つた。「貴君がそこに居るやうに、私も確に茲に居ります」

「なにより嬉しいですね」と不屈者が言つた。「貴君を此の路で見付けたのは」

「私も矢張嬉しい」と正直翁が言つた。「貴君が跪づいてをられたのを見ましたので」

それを聞いて、不屈者は赤面して言つた。「やあ、跪づいてゐる所を見たのですか」

「見ましたとも」と正直翁が言つた。「それを見て、心に嬉しかつた」

「それでどう思ひましたか」と不屈者が言つた。

「どう想ふ！」と正直翁が言つた。「どう想ひませう。これは路に正直の人が居るわい。次第に道連れになれるなと想ひました」

不屈者は言つた。「貴老が悪く想ひなさらなかつたとすれば、私はどんなに仕合せでせう。若し私がさういふ者でなければ、獨りでどんなに苦しみを忍ばねばならんでせう」

「それは眞實ですな」と正直翁が言つた。「貴君のその恐怖は旅人の主と貴君の靈魂との間柄が正しいからだと思ひます。『恒に怖れる人は幸はひなり』とありますからな」

眞理剛。「さて、兄弟、今しがた貴君が跪づいて居られた原因はごういふのですか、どうぞお聽せ下さい。何にか特別の恵みを受けなすつたためですか、それとも別に譯がありますか」

不屈。「いや、唯お互ひに迷魂の地にありますのでな。私は茲に來る道すがら、つくづく危険な路にあることを想ひました。旅路を遙々茲まで來て、足を憩めたばかりに滅ばされた者も澤山にありますのでな。私は又この場所を殺される人の死状を想ひました。茲で死ぬ人は激しい死に方をしませんから、死ぬことを怖がりません、睡るやうに逝つてしまふので、樂しみ願つて死の旅に出立します。實際満足してその睡い病氣の心任せになつてしまふのです」

その時正直翁は言葉を遮切つて言つた。「二人の者が小亭に睡つてゐるのを見ませんでしたか」

不屈。「えい、見ました、見ました。不注意者と無謀者を見受けました。あゝして横たはつたまゝ、遂に腐つてしまふでせう(〇七)それは兎に角、私の話を續けさせて下さい。私はさうして想ひ沈んでゐますと、年を老つてゐても、いかにも愉快な装ひをした婦人が私の前に現はれて、三つの物を私に與れやうと言ひました。即ちその身體とその財布とその寢床です。實を申せば、私はその時疲れてはゐるし、睡くはあるし、それに鼻の雛のやうに貧しかつたのです。その魔女は多分その事を知つてゐたのです。私は再三それを撥付けたのですが、その女は平氣な顔でニコ／＼してゐるのです。私が怒り出しても、全つたくお願ひなしです。さうして又それを申し出して、その言ふ通りにすれば、私を幸福な偉い者にしてやると言ひます。自分は浮世の女主で、人間が幸福になるのは自分の力ですと、その女が言ひました。私とその名を問ねると。泡沫夫人だと言ひました。それを聞いて、私は尙ほその女から遠ざからうとしたのですが、それでもまた女は誘惑を續けました。そこで私は貴君方が御覽になつたやうに跪つて、兩手を擧げて、聲高く、神の助けを祈つたのでした。さうすると

貴君方がお出でになつた時に恰度その貴婦人は立ち去りました。そこで私は尙ほその大なる救拯を感謝いたしましたわけでした。實際その女は私に善からぬことを企だてたのですから。私に旅を止めさせやうとしたに相違ありません」

正直。「それは無論悪い企謀があつたのですな。それは兎に角その女を、私は見たこともあ

るし、その女の譚を讀んだこともあるやうです」

不屈。「多分さうでせう」

正直。「泡沫夫人！それは丈の高い優雅な貴婦人で、色は淺黒くはないですか」

不屈。「さうです、全然的中しました。恰度さういふ女です」

正直。「いかにもすらすら／＼と話しをして、言葉の句切り／＼に微笑みはしませんか」

不屈。「正しくその通りです。さういふ特徴があります」

正直。「帯のあたりに大きな財布を着けてゐて、時々その中に手を入れて、金を弄くつて、さもさうするのが心の娛樂のやうに見えませんでしたか」

不屈。「その通りです。あの女を茲へ立たせて置いて、それ以上にあの女のことを傳へることは出来ません。あの女の人相はそれで善く現はれました」

正直。「それならあの女の肖像を描いた人は善い畫工なのですな、あの女のことを書いた人は眞實の事を記したのですな」

大勇。「その女は魔女です。その魔術のために、この土地は人を迷はす所となつたのです。その膝を枕にする者は、斧を掛けてある下の斷頭臺に頭を載せて置くやうなものです。その美しさに眼をくれる者は誰でも神の敵と見なされますからな(四〇四)。凡て旅人の敵を皆な華やかに見せかけるのも、あの女の仕業です。實にあの女は旅人の生涯から多くの人を墮かせました。あの女は大變な饒舌家で、常に自分もその娘達も旅人の誰れ彼の尻につきまごつて、この世の歡樂を讀めそやします。あの女は厚かましい耻しらすの淫婦なので、誰にでも言葉をかけます。貧しい旅人だといつも嘲笑つて、富める者には莫迦にお世辭が善いです。狡いことをして金でも儲けた者があると、あの女は得意になつて家から家に觸れ歩きます。饗宴や酒宴が大好きで、いつもさういふ座席に忙しなです。ある所ではあの女のことを女神のやうに言ひはやすので、これを崇拜する者もあります。あの女には欺偽をする時間があるし、公然定めた場所があるのです。その欺偽についても自分に善く較らべられる者はないと陽さまに言つてゐます。誰でも自分を愛し、自分を重んじてくれる者なら、孫のやうな者どでも

一緒に住むことを約束します。又ある場所とある人々の前には、その財布の黄金を塵芥のやうに播き散らします。慕はれたり、善く言はれたり。人の胸に憑りかゝるのが好きです。自分の持物を讀めて倦むことを知らず、自分を最も善く思ふ者を愛します。自分の勸言に従ふ者があれば、王冠でも王國でも與へることを約束しますが、しかもその多勢の人達を絞首臺に連れて行き、幾千萬人でも地獄に陥れるのです」

不屈者が言つた。「あゝ、私があの子の言ふ事を拒んだのは何んといふ仕合せでしたらう。さもなければ何處に連れて行かれたやら」

大勇。「何處ですぞ。それは神のほかに知る者はありません。でも、大概「滅亡と沈淪に人を溺らす所の愚にして害ある種々の慾(テモテ)に連れて行つたでせう。アブサロムを父に逆かせ、又ヤラベアムをその主人に叛かせたのもあの女です。主を賣るやうにユダに勸めたのも、又聖い旅人の生涯を棄てるやうにデマスを説き服せたのもあの女です。あの女がこれまで爲した害悪を言ひ盡すことは出来ません。君臣の間も、親子の間も、隣り同士の間も、夫婦の間も、われと我が身の間も、肉と靈との間も、皆な悪くするのはあの女です。だから、不屈者さん。貴君のお名前のやうに、毅然と屈しないで下さい」

この談話を聞いて、旅人達は歡び且つ慄へた。やがて聲を合せて、慙う歌つた。

「旅人の身こそ危うし、

その敵はいかに多きぞ。

罪ある路は多くとも、

生ある者は知りがたし。

溝の幾つは飛び退くも、

尙ほ躡づかん、泥濘へ、

フライ鍋をば避くるとも、

尙ほ飛び入らん、火の中へ」

それから私が見てゐると、彼等は遂にベウラの地に着いた。茲には夜も晝も日輪が輝やいた。人々は疲れてゐるので、茲で暫らく憩むことにした。この國は旅人の共用地であつた。茲には天國の大君に屬した菓樹園や葡萄園があつて、旅人たる者は誰でもそれを取つて喰ふことを許された、人々は茲で暫らく休んでゐる中に、鐘が鳴つて、喇叭がいかに樂しげに響くので、睡ることが出来なかつた。しかし全たく善く眠つたやうに、いかに氣が爽快に

なつた。茲で又街道を歩く者共の話し合ふ聲がした。「また多勢旅人が町に着きましたな」と一人が言へば、「もう河を渡つて、今日黄金の門に入つた者も澤山あります」と他の一人が答へた。「恰度今輝やける者が澤山町に來られましたから、又旅人達が到着するご見えますな。茲に迎へて、旅人達の悲哀を慰めるためせうから」と言ふ者もあつた。

やがて旅人達は起ち上つて、あちこちと歩いた。今やその耳は天音に充され、その眼は天の異象を見て悦んだ。この地では、聞くもの、見るもの、感ずるもの、嗅ぐもの、味はふもの、何に一つとしてその胃や心の害にならなかつた。その越えて行かねばならぬ川の水を味はつて見ると、尠し苦味があつたが、呑み下して見ると、氣持が善かつた。

此處には昔から旅人であつた人達の名簿や、その人達が爲した有名な事蹟の歴史があつた。又この町の者の談話に據ると、或る人が川を渡る時には、満潮になるし、又他の人が渡る時には、干潮になるのであつた。されば渡る人に従がつて、淺瀬になつたり、川岸に溢れたりするのであつた。

此所で町の子供達は王の花園へ行つて、旅人達のために花束を集めて來て、いと親切にこれを持つて來た。茲には又樟腦、甘松香、呷夫藍、省藤、肉桂、乳香、沒藥、伽羅、その他

重なる香料を生じた。そのために旅人達が茲に滞在せる間の部屋は、いかにも香しかつた。又その香膏を身體に塗つて、定められた時に川を渡る準備をした。

さて茲に滞在して、善き時機を待つてゐる間に、天の都から、旅人基督者の妻である基督女といふものに大切な用向で、一人の飛脚が来たといふことが町で評判された。尋ね歩いた舉句に基督女の居る所の家は見付つた。飛脚は一通の書面を基督女に渡した。その文面には、「御機嫌麗はしかれ。善き御婦人よ、主はあなたをお召しになりますから、今より十日の内に、あなたは不滅の衣をまごひなさいまして、主の聖前にお出でなさいませ。この事を一寸お知らせいたします」と認めてあつた。

飛脚の男はこの手紙を読み聽せてから、自分が眞正の使者である確かな記標を見せて、急いで御仕度をなさいますと告げた。その記標といふのは、その尖を愛で磨ぎ澄した一本の矢であつた。で、基督女は忽ち心を動かして、定められた時に行かねばならぬことを次第に覺悟するに至つた。

基督女はその時が来たのだ、自分が仲間の内で第一に川を渡るべきことを悟つて、道案内の大勇者を呼んで、事の由を告げた。すると大勇者は心からその報知を歡んで、自分にもさ



基督女子供達を祝福す

ういふ飛脚が來たら、どんなに嬉しからうと言つた。基督女は萬事旅の用意について指圖を願ひますと言つた。で、大勇者は、云々なさいまし、と指圖して、それから一同に川岸まであなたを御見送りしませうと言つた。

それから、基督女は子供達を呼んで、一人々々祝福してから、彼等の額におかれた記號が讀めるのを歡ぶこと、茲まで一緒に來たのが嬉しいこと、又その衣を皆ないかにも白くしてゐるので心残りがないことを話した。遂にその持てる僅かなものを貧しい人達に置土産にして、使者の來るのを用意して待つやうに、息子達と娘達に告げた。

案内者と子供達に慫う言つてから、次に眞理剛者を呼んで、貴君は何處でも眞心を盡しなさいました。死に至るまで忠信でおありなさいまし。さうすれば大君は貴君に生命の冠を下さいます(黙示録二〇十)。それからどうぞ子供達の面倒を見てやつて下さいまし。若し何時でも弱ることがございましたら、どうぞ慰さめてやつて下さい。息子達の妻でございます私の娘達のことにつきましては、皆な今まで忠實でございましたから、約束されましたことは最後に成就されるでございます。それから基督女は不屈者に一つの指環を與へた。

それから基督女は正直翁を呼んで、あなたは眞のイヌラエル人で、心に詭りのない方です

のね」(ヨハネ一)と言へば、正直翁もまた、「シオンの山へ御出立の日は好い天氣にしたいものではない。それからあなたが渡りになる時に川が靴も濡さぬほどでしたら、どんなに嬉しいでせう」と言つた。基督女はそれに答へた。「水があつても、なくつても、私は渡りますつもりでございます。天氣がどうでありましても、彼方へ参りさへすれば、幾らでも坐つて休んで乾かす時がございます。」

やがて性の善い逡巡者が基督女の側に來た。で、基督女は彼に向つて、「貴君は茲までお出でなさるに随分御難儀をなさいましたね。でもこれからお休みになつて晴々となさいませう。どうぞ御目を醒まして、御仕度をなさいまし。想ひがけない時、お使者が参りますから。」

その後から氣落者とその娘の多怖女が入つて來た。基督女はこの親子に向つて、「あなた方はいつも巨人絶望者と疑惑の城から救はれなすつたことを思ふて感謝なさいまし。その恵みのために、安らかに茲までお出でなさることが出來たのですから。どうぞお目を醒まして恐怖を棄て、下さいまし。お氣を確かにして、最後まで望みをお持ちなさいまし。」

やがて基督女は弱心者に向つて、「あなたは巨人殺善者の口から救かりなさいましたのね。これから限りなく生命の光に住んで、嬉しくも主に御目にかゝられませう。唯御忠告いたしま

すが、主があなたに使者を遣されます前に、大君の善を恐れたり、疑がひ易いお心を悔ゆるやうになさいましね。さうしませんとその弱點のために、主の御前に立つて赤面なさるやうな事がございませうから。」

さて基督女の行くべき日になつた。沿道はその出立を見物する人達で一杯になつた。また見よ、川の向ふ岸には、都の門まで基督女を送るために、上から下つて來た馬と馬車とが一杯であつた。やがて基督女は出かけた。川の岸まで見送つた人々に告別の言葉を殘して、川へ入つた。基督女が此岸で言ひ殘した最後の言葉は、「主よ、御許へ私は参ります。願はくは御名を崇めさせたまへ」といふのであつた。その子供達と友達は、基督女がその出迎へた人に伴はれてその姿が見えなくなつたので、そこから立ち歸つた。やがて基督女は川を渡つて、都の門へ入つて、良人の基督者と同じやうに、有らゆる歡喜の儀式を以つて迎へられた。母親に行かれてしまつたので、子供達は泣いた。けれども大勇者と眞理剛者は調子の佳い鉞や縦琴を弾いて歡んだ。やがて人々は銘々その宿に歸つた。

程經て、町に再び飛脚が來た。今度は逡巡者を招くためであつた。やがて飛脚は彼を尋ねて、「私は貴君が拐杖をつきながらも、愛して従がひなされた主の御名に依つて参つたので

ございます。私が参りました用向は、来る復活祭の翌日に、主はその王國で晚餐を共にした
ひから、貴君をお呼び申せこのことでした。ですから、どうぞ旅の仕度をして下さい。飛脚
は憊う言つて、その真正の使者である記號として、「われ汝の黄金の盞を碎き、銀の紐を解た
り」(傳道書十)といふ言葉を述べた。

そこで逡巡者は同伴の旅人達を呼び集めて、憊う言つた。「私の許に使者が参りました。貴
君方にも確に参るでございませう。さうして眞理剛者にその遺言書を作るやうに頼んだ。彼
が人々に紀念として遺すものは、拐杖と他人の幸福を望む心のほか何んにもなかつた。で、
彼は憊う言つた。「此等の拐杖は私の足跡は踏んで来る若い方に遺します。その人に私よりも
一層確りやつていたやくことを切に願ひいたす心を遺して参ります」

やがて彼は大勇者にこれまでの親切な案内を感謝して、愈々出かけた。川の水涯に着いた
時に、憊う言つた。「もう此等の拐杖も要らなくなりました。彼岸には馬も馬車も待つてゐま
すので、それに乘れませうから」。彼が最後に言ひ残した言葉は、「歎こびて生命を迎へん」と
いふことであつた。やがて彼は進んで行つた。

その後弱心者の許に消息があつた。飛脚は號筒を鳴して、その部屋の入口に音づれた。や

がて室に入つて来て、憊う言つた。「私が参りましたのは、主が貴君をお召しになりますこと
をお知らせするためです。近い内に、貴君は主の御顔の光輝を御覽になりませう」私の使命の
偽りでない記號には、「窓より窺がふ者は目昏む」(傳道書十)といふ語を進上いたします」

そこで弱心者は友達を呼んで、自分の許に使者の來たこと、又その使命の偽りならぬ記號
を受けたことを話した。それから憊う言つた。「私はごなたにも紀念とするものがありません
ので、遺言書の作りやうがございません。この弱い心は私の参る所には必要がございません
から、後に残すことは残しますが、最も憐れな旅人にでも差上げるほどの値はございません。
ですから、眞理剛者さま、私が去りました後で、どうぞお願ひですから、塵塚にでも埋めて
下さい」かう言つてから、やがて出立の日が來たので、前の人やうに川へ入つた。その最
後の語は、「信仰と忍耐を保たん」といふのであつた。さうして彼岸へ渡つた。

それから餘程日が経つて、氣落者が呼ばれた。飛脚は来て、憊ういふ消息を傳へた。「貴君
でせう、慄へなさる方は、主のお召ですから、次の安息日に主の許へお出で下さい。さうし
て凡ての疑惑から救はれた歡喜を申し述べなさい」又使者は自分の使命が眞正である證據と
して、「蝗もその身に重し」(傳道書十)といふ言葉を與へた。

さて氣落者の娘である多佈女はその事を聞いて、父親と共に行くことを願つた。そこで氣落者は友達に向つて、「私も娘も皆さんの御存知のやうな者でありまして、これまで皆さまにどれ位の御迷惑をかけたか知れませんが、私も娘も申し残したいことは、私共のやうに力を落したり、又女々しく怖れたりすることが、私共の立ち去りました後には、何誰にも傳はりませんことゝです。私が逝りました後には、どうもそれが他人様の心に入らうとするかも知れませんから。打明けて申せば、私共が初めて旅人となります時に、さういふ幽霊が私共に附纏ふて、どうしても振り離すことが出来ませんでした。その幽霊は彷彿ひ歩いて、旅人に附纏はうとするであります。どうか私共を善い手本として、戸を閉めてそんな者を入れないやうにして下さい」

やがてこの親子の出立すべき時が来たので、川の水涯に行つた。氣落者の最後の言葉は、「いざさらば、夜に暇を告げ、歡びの日をば迎へん」といふのであつた。その娘は歌をうたひながら川を渡つたが、誰にもその言ふ處が解らなかつた。

それから暫らく日が経つて、飛脚が町に来て正直翁を尋ねた。その住居に来て、愴ういふ手紙を渡した。「卿は今日から一週間の内に、父の家に來たりて、主の御前に立つことを命ぜ

られました。私の使命の偽りならぬ記標は「歌の調の娘等は皆な身を卑くす」(傳道書十)といふ語です」

そこで正直翁は友達を呼び集めて、愴う言つた。「私は逝りますが、別に遺言はいたしません。私の正直につきましては、私はそれを持参いたしました。後から來る人にその風評をさせませう」やがて出立すべき日になつたので、川を渡らうとした。折しも川は水が漲つて、所々岸に溢れてゐた。けれども正直翁はその存生中に、良心者といふ人と茲で遇ふ約束をしておいたので、その人はその約束通り、正直翁に手を貸して、川を渡らせた。正直翁の最後の語は、「恩寵は支配せり」といふのであつた。かうして彼は世を逝つた。

その後眞理剛者が同じ飛脚に依つて主の召を蒙つたといふ評判が立つた。その召呼が眞正である記標として、「吊瓶は泉の側にて壞る」(傳道書十)といふ語が與へられた。彼はその覺悟をして、友達を呼び集めて、その事を話して、愴う言つた。「私は今わが父の家に参ります。茲に來るまで多くの難儀をいたしました。彼岸にさへ到着すれば、今までの有ゆる艱難は更に悔る所はありません。私のこの劔は私の後から來る旅人に遺します。この劔を獲る人は、私の勇氣と手練も受くるであります。私のこの傷痕は持参いたして、私がどんな戦をしま

したか、報酬の主にお目にかけていたいと思ひます」

やがて出立の日になつたので、多勢の人は川の岸まで見送つた。彼が川へ入る時に、「死よ、爾の刺は何處にあるや」(コリント前十)と言つた。更に深みへ進んだ時に、「墓よ、爾の勝は何處にあるや」と言つた。やがて彼が渡つてしまふと、彼岸では有らゆる喇叭を鳴らして、彼を迎へた。

やがて不屈者が主の召を受けた。この不屈者は旅人達が迷魂の地で跪いて祈つてゐる所を見つけたその人である。飛脚は公然彼にその消息を傳へた。その趣旨は「主がいつまでも彼を遠く離しておくのを好みたまはぬので、生命の變化に備へなさい」とのことであつた。それを聞いて、不屈者は考へ込んだ。で、使者は言つた。「貴君はなにも使命の眞正なることを疑ふ必要はありません。その眞實である記標には、「轆轤は井の傍にて破れたり」(傳道書十)といふ語を進ませませう」

そこで不屈者は道案内の大勇者を呼んで、慫う言つた。「私は不幸にも旅路を久しく貴君と連れ立つことが出来ませんでした。御都合になつた時から、種々御世話になりました。就いては一つ御願があります。私は家を出ます時に、妻と五人の小さい子供を残して参りまし

た(貴君はまた御主人の家にお歸りになつて、これからも聖い旅人達の道案内をなさるでせうから)、どうぞ私の家族に人を遣つて、私の身に起りました事を知らせてやつて下さい。それから私が幸ひにも茲に到着したとや、私が唯今祝福の裡にあることを話してやつて下さい。又基督者さんとその奥様の基督女さんのとや、基督女さんとその子供達が父親の後を慕つて旅に出たことなどを話してやつて下さい。又基督女さんが遂げなすつた仕合せな最後の事や、その行く先きのことなども話してやつて下さい。私は家族へ遣るものといつて、祈禱と涙のはか何にもありません。唯貴君がお知らせ下さつて、私の家族が説得されましたら、それで結構でございます」

不屈者はかやうに事を始末して、出立の時が来たので、川へ入つて行つた。折しも川波はいとも静かであつたので、不屈者は川の中途で暫らく立留つて、見送りの人々に向つて、慫ういふ話をした。

「この川はこれまで多くの人の恐怖でありました。實は私もそれを想ふて幾度も怖れたのであります。然るに今私は安らかに立つて居ります。私の足が川の底に堅く立つて居ることは、イストラエル人がヨルダンを渡つた時に、契約の櫃を昇ついでゐた祭司達の足(ヨシア三)のやう

であります。この川の水は實際苦味があつて、胃を寒からしめます。しかし渡りゆく彼岸で私が待たれますことを想へば、私の胸は熱い火のやうに燃えてまゐります。

「私は今や旅路の終りにあります、私の惱みの日は終りました。私のために荆棘の冠を被りたまへる主の頭と、私のために唾せられたその御顔をこれから行つて拜まうと思ひます。

「私は今まで主の噂と信仰に依つて生きて居りましたが、これから彼岸へ参れば、眼のあたり主を見て生活し、主の御側に居つて楽しむことが出来ませう。

「私はこれまで主のことを聴くのが好きで、主の足跡が地にあるのを見ては、その跡を踏みたいと望みました。

「主の御名は私にとりて香箱のやうでした。實に有ゆる香料よりも芳しかつたのであります。主の御聲は私にとりて最も快かつたのであります。主の御顔は世の人が日の光を慕ふにもまして、私に慕はしかつたのであります。又主の御語は常食として私を養なひましたし、又

疲れて弱つてゐる時の薬にもなりました。主は私を支へて、私を邪曲より扶け出されました。實に主は私の歩調をその路に於て強くなさいました」

彼がかういふ話をしてゐる間に、その顔色が變つて、その氣魄は沈んで行つた。で、彼は、

「御許に参ります、私を受けたまへ」と言ひ終つて、その姿が見えなくなつた。

天つ國では馬や馬車が馳せ違ふし、喇叭を鳴らす者や笛を吹く者があるし、歌手や樂人が弦を奏するし、いかに榮光に充ちてゐた。かやうに旅人達は歓迎されて、美はしき都の門へ一人々々入つて行つた。

基督女の連れ立つた四人の子供とその妻子のことについては、彼等が彼岸へ渡つしまふまで、私はそこに留まつてゐなかつた。聞く所によると、彼等はまた其處に住んでゐるので、

そのために其處では基督者の子孫が益々増加するさうである。

私が再びかの路へ行く折があつたら、茲で書き洩したことを聞きたがる人達にまたお話しませう。今は暫らくわが讀者にお別れします、さやうなら。

東京府立第一中学校
何員生
藤田千代田

天路歷程

續篇終

不許複製

大正十二年十二月十一日印刷
大正十二年十二月十四日發行

〔定價壹圓十五錢〕

翻譯者 松本 赴

發行者 東京市京橋區尾張町 丁目十五番地
福永文之助

印刷者 橫濱市太田町五丁目八十七番地
村岡平吉

發行所 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
警醒社書店
電話東京五五三(電話號碼一五八七)

東

■ 松本 雲

■ 恩寵溢るるの記

定價 一圓
郵税 十二錢

■ 本

■ 小聖 戰 (版再)

定價 一圓十錢
郵税 十二錢

■ 原 氏

■ 天路歷程

定價 一圓五十錢
郵税 十二錢

■ 著 譯

■ 山室軍平先生著

■ 基督敎講話

四六到クロス
定價 一圓卅錢
郵税 八錢

日本に於ける救世軍最高位の人として而かも、一個の平民宗教家たる著者は、わが宗教界に在つて、福音宣傳、社會改良事業に著々偉功を奏しつゝある精力絶倫の活動家、事務家なると共に、一面に心靈的方面の勇者也。その山をも移す信仰力はやがて、先生の雄辯に熱あらしめ、力あらしめ、衆々人々の胸にアツピールする所以也。本書「基督敎講話」は即ち著者が、曠蕪なる宗教的經驗、強烈なる信仰生活、徹底せる實生活の産物也。生ゆるき信仰を排し、灰色の生活を斥けて、光と力とに充ちたる生を欲する人々に、讀んで捧ぐ。

■ 小聖

者

フオガッア
小野村林三蔵共譯
吹田住

定價 一圓五十錢
郵稅 十二錢

■ 小魔

ケ

沼

サ
波邊千冬譯

定價 七十錢
郵稅 八錢

■ 小未だ見ぬ親

マ
五來素川譯

定價 六十錢
郵稅 六錢

■ 小アダム・ビ井ド

エ
松本雲舟譯

定價 五十錢
郵稅 六錢

終

